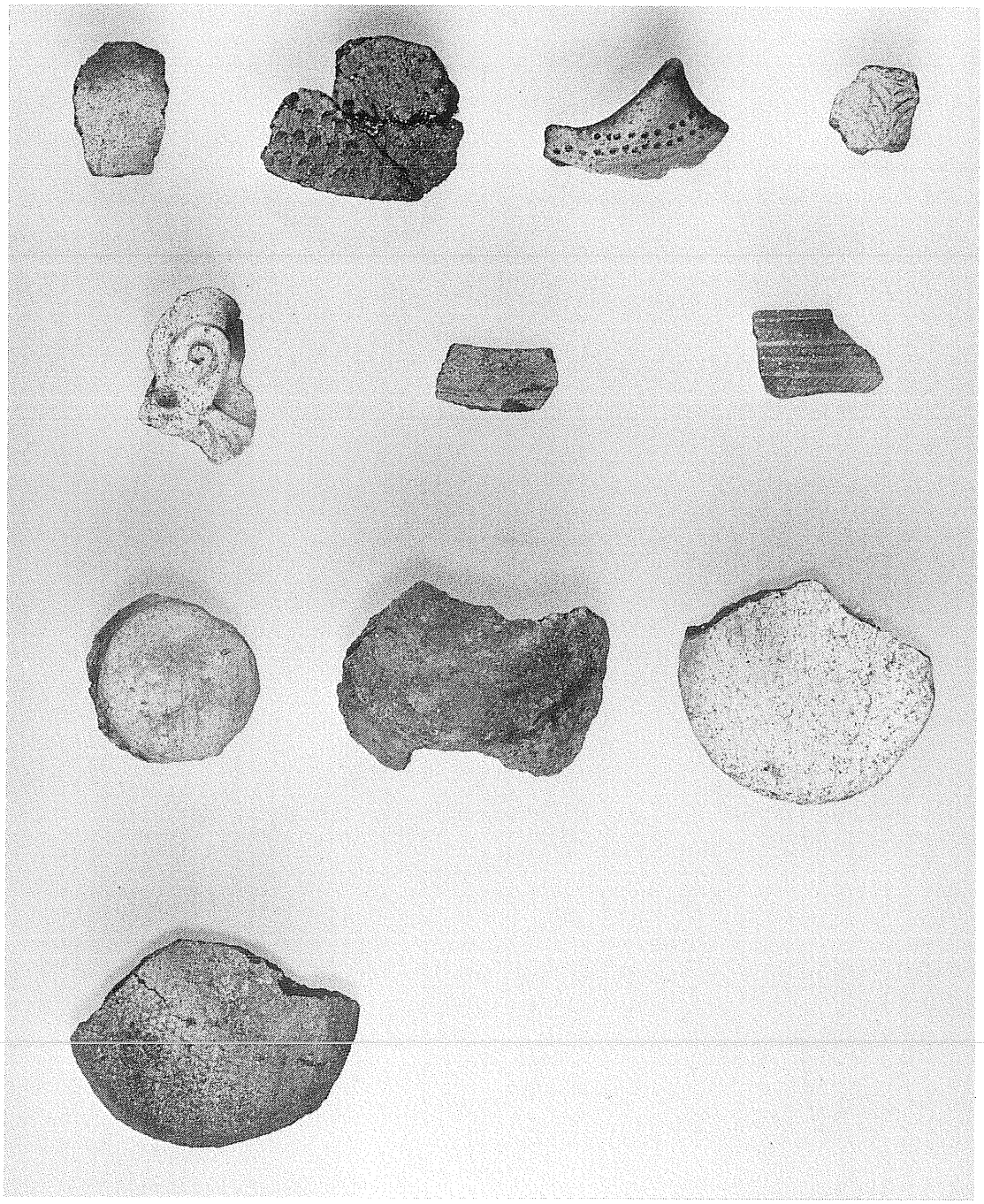
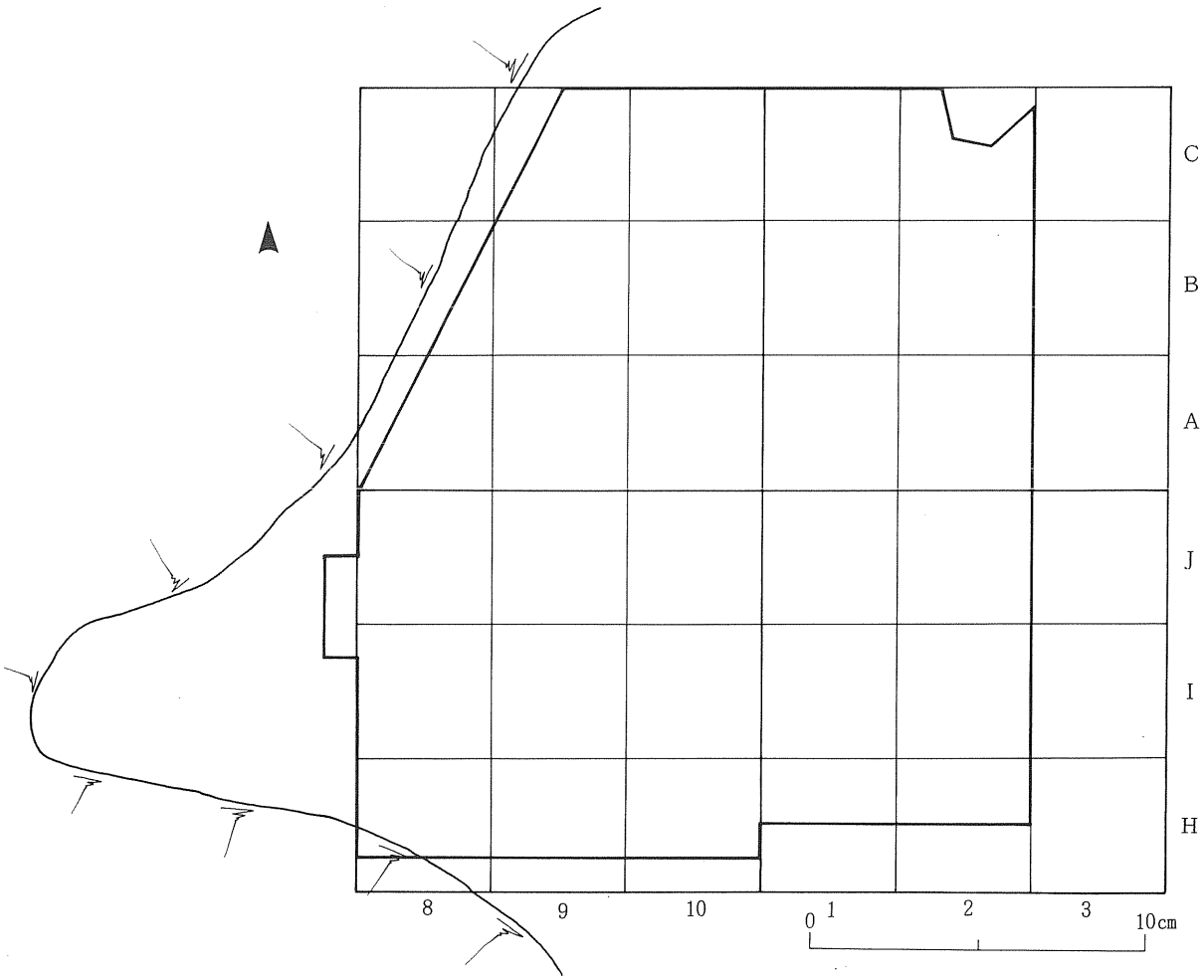


図版18　遺構外出土土器



第２図　Ｋ区グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落から御所野に通る市道の中間地点に、北西に広がる標高34ｍ程の台地がある。秋田営林署の旧苗畑があったところで、遺跡はここに位置する。

発見した遺構は、弥生時代の土坑である。遺物は、弥生式土器、平安時代の土師器甕、土錘などが出土している。遺跡の南西の台地には、弥生時代の土坑、平安時代の墓地を検出した湯ノ沢Ｆ遺跡、縄文時代中期末葉の湯ノ沢Ｈ遺跡がある。

調査経過

北西に広がる台地の地形を考慮して、ＡからＫまでの地区を設定し、範囲確認調査を兼ねてトレンチによる調査を行った。その結果、Ｋ区を除いた他の地区には、遺構、遺物はほとんど認められなかった。そこでＫ区をグリッドによって拡張し、集中的に調査を実施した。結果、弥生時代の土坑19基を検出し、土坑内からは弥生式土器が若干出土した。

遺構と遺物

土坑（第３～５図）

19基の土坑を検出した。プランは、円形、楕円形を呈するもので、深さは平均すると76cmを計る。断面形は袋状、鍋底状をなすものが多い。詳細は表（表１）にしてまとめた。

出土遺物

１号土坑出土遺物（第６図）

土器：１は口径15.3cm、器高6.6cmの蓋形土器である。中程から急に外反し、底部下端と、くびれ部に一条づつ沈線がまわる他は無文である。２は口径12.2cm、器高16cmの甕形土器である。頸部に二条の沈線がまわる。地文はＬＲの単節斜縄文で、横、斜位回転である。

11号土坑出土遺物（第６図）

土器：３は復元すると口径15.7cm、器高6.5cmの鉢形土器である。口縁部と体部下端に一条づつ沈線がまわる。間に２個１対の小突起を配し、変形工字文で連絡させている。ベンガラが塗布されていたと思われ、部分的に残存している。

12号土坑出土遺物（第６図）

土器：４は底形5.9cm、現存高11.5cmの壺形土器と思われる。胴部の４ヶ所に小さな粘土瘤をつけ三条の平行線がまわる。胴上部には二条の沈線を単位にし、弧状に配している。沈線間に縄文を残し、他は磨消している。地文はＬＲの単節斜縄文斜位回転である。

Ｂ区トレンチ出土遺物（第７図）

Ｂ区トレンチ調査で土師器甕破片、小形土錘が出土した。

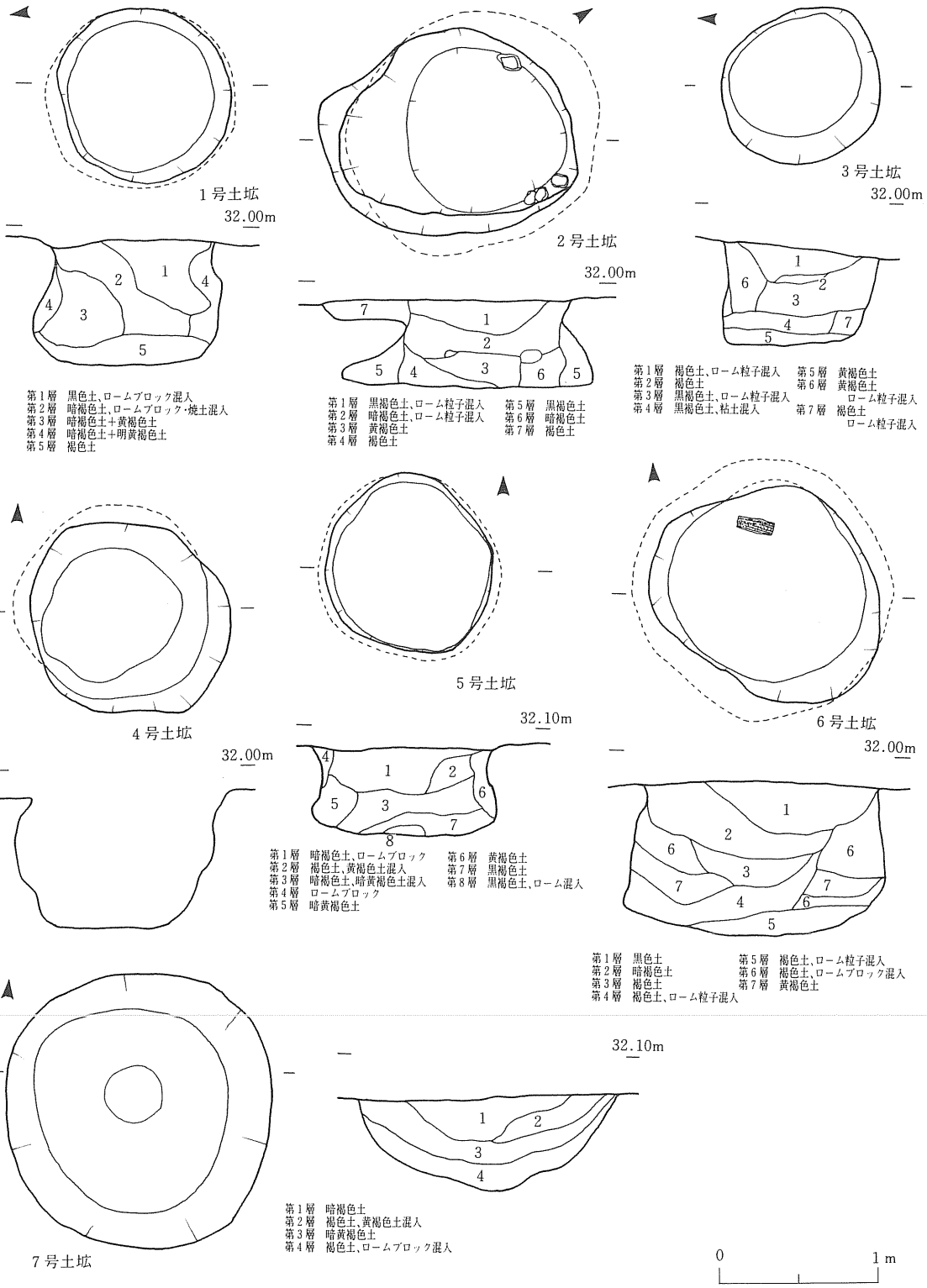
土器：１は土師器甕である。復元口径11.7cm、器高13.7cmを計る。頸部は「く」の字に外反し、口縁はまっすぐ立ち上がる。体部下方には手持ちのヘラケズリを施している。

土錘：２～68は小形の土錘である。長さ1.8～3.4cm、直径0.9～1.2cmの範囲に入るものである。

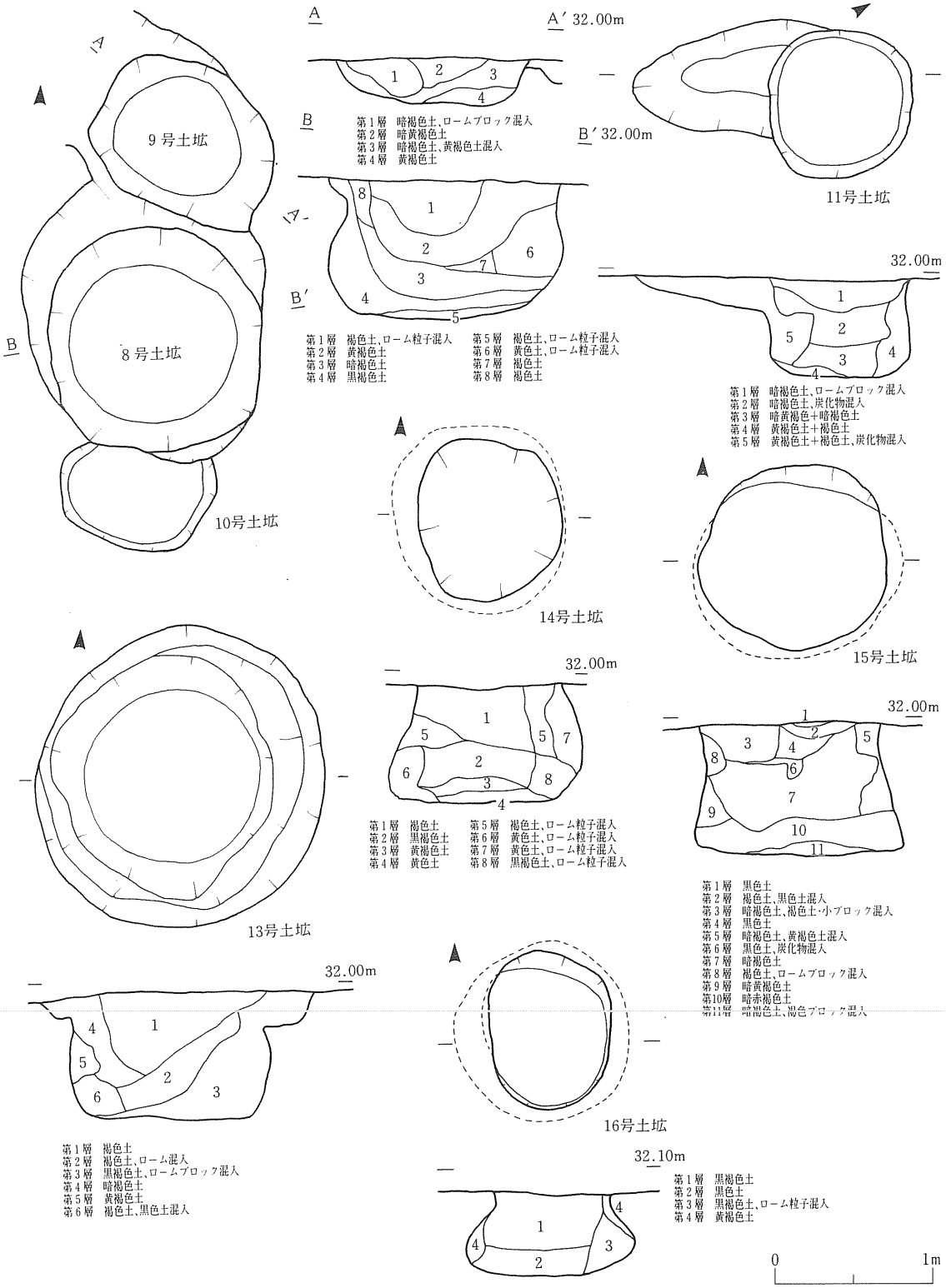
弥生時代土坑一覧表

（表１）

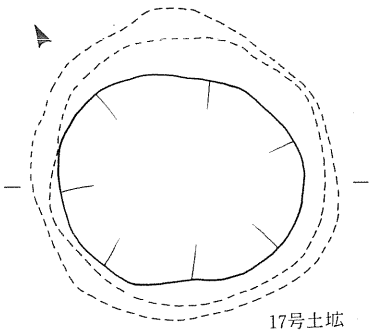
土坑番号＼項目	規模 (m) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物
1 号	1.13	1.09	0.78	円形	袋状	第6図1・2
2 号	1.6	1.31	0.55	楕円形	袋状	
3 号	1.07	0.94	0.65	円形	ピーカー状	
4 号	1.34	1.21	0.84	円形	袋状	
5 号	1.17	1.05	0.55	円形	袋状	
6 号	1.54	1.25	0.98	楕円形	袋状	
7 号	1.74	1.67	0.59	円形	鍋底状	
8 号	1.0		0.88	円形	袋状	
9 号	1.16	0.94	0.28	楕円形	鍋底状	
10 号	1.0	0.6以上		楕円形		
11 号	0.93	0.9	0.6	円形	ピーカー状	第6図3
12 号	1.22	1.06	0.75	楕円形	ピーカー状	第6図4
13 号	1.94	1.82	0.83	円形	袋状	
14 号	1.03	0.9	0.73	楕円形	袋状	
15 号	1.2	1.18	0.85	円形	袋状	
16 号	1.02	0.75	0.52	楕円形	袋状	
17 号	1.31	1.1	1.08	楕円形	袋状	
18 号	2.42	1.65	0.52	楕円形	鍋底状	
19 号	1.64	1.41	0.93	楕円形	ピーカー状	


1 号土坑
32.00m
第1層　黒色土、ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、ロームブロック・焼土混入
第3層　暗褐色土＋黄褐色土
第4層　暗褐色土＋明黄褐色土
第5層　褐色土
2 号土坑
32.00m
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
第4層　褐色土
第5層　黒褐色土
第6層　暗褐色土
第7層　褐色土
3 号土坑
32.00m
第1層　褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土
第3層　黒褐色土、ローム粒子混入
第4層　黒褐色土、粘土混入
第5層　黄褐色土
第6層　黄褐色土
ローム粒子混入
第7層　褐色土
ローム粒子混入
4 号土坑
32.00m
5 号土坑
32.10m
第1層　暗褐色土、ロームブロック
第2層　褐色土、黄褐色土混入
第3層　暗褐色土、暗黄褐色土混入
第4層　ロームブロック
第5層　暗黄褐色土
第6層　黄褐色土
第7層　黒褐色土
第8層　黒褐色土、ローム混入
6 号土坑
32.00m
第1層　黒色土
第2層　暗褐色土
第3層　褐色土
第4層　褐色土、ローム粒子混入
第5層　褐色土、ローム粒子混入
第6層　褐色土、ロームブロック混入
第7層　黄褐色土
7 号土坑
32.10m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、黄褐色土混入
第3層　暗黄褐色土
第4層　褐色土、ロームブロック混入
0
1 m

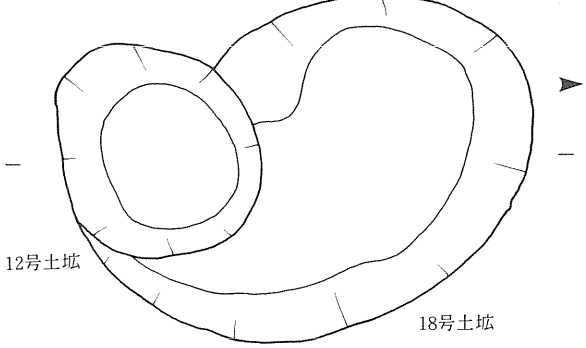
第3図　土坑


9号土坑
8号土坑
10号土坑
A
A′ 32.00m
B
B′ 32.00m
第1層 暗褐色土、ロームブロック混入
第2層 暗黄褐色土
第3層 暗褐色土、黄褐色土混入
第4層 黄褐色土
11号土坑
第1層 褐色土、ローム粒子混入
第2層 黄褐色土
第3層 暗褐色土
第4層 黒褐色土
第5層 褐色土、ローム粒子混入
第6層 黄色土、ローム粒子混入
第7層 褐色土
第8層 褐色土
32.00m
第1層 暗褐色土、ロームブロック混入
第2層 暗褐色土、炭化物混入
第3層 暗黄褐色＋暗褐色土
第4層 黄褐色土＋褐色土
第5層 黄褐色土＋褐色土、炭化物混入
14号土坑
15号土坑
13号土坑
32.00m
第1層 褐色土
第2層 黒褐色土
第3層 黄褐色土
第4層 黄色土
第5層 褐色土、ローム粒子混入
第6層 黄色土、ローム粒子混入
第7層 黄色土、ローム粒子混入
第8層 黒褐色土、ローム粒子混入
32.00m
第1層 黒色土
第2層 褐色土、黒色土混入
第3層 暗褐色土、褐色土・小ブロック混入
第4層 黒色土
第5層 暗褐色土、黄褐色土混入
第6層 黒色土、炭化物混入
第7層 暗褐色土
第8層 褐色土、ロームブロック混入
第9層 暗黄褐色土
第10層 暗赤褐色土
第11層 暗褐色土、褐色ブロック混入
32.00m
第1層 褐色土
第2層 褐色土、ローム混入
第3層 黒褐色土、ロームブロック混入
第4層 暗褐色土
第5層 黄褐色土
第6層 褐色土、黒色土混入
16号土坑
32.10m
第1層 黒褐色土
第2層 黒色土
第3層 黒褐色土、ローム粒子混入
第4層 黄褐色土
0
1m

第4図　土坑

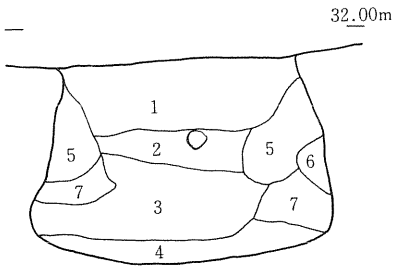


17号土坑

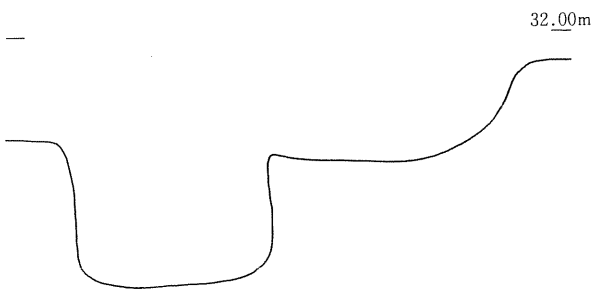


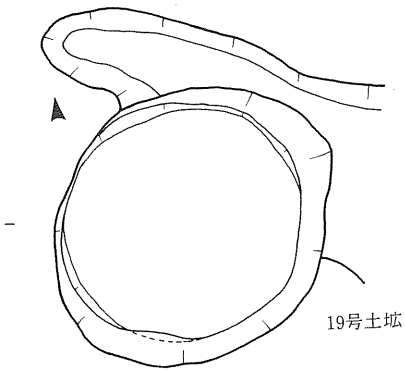
12号土坑

18号土坑

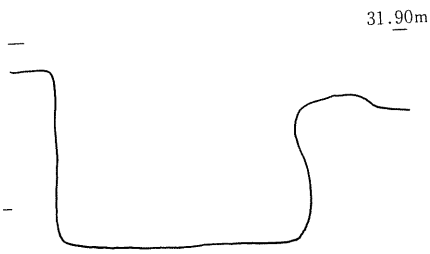


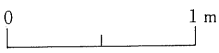
第1層　黒褐色土
第2層　黒色土
第3層　黒褐色土
第4層　黄褐色土
第5層　ロームブロック
第6層　ロームブロック＋黄褐色土
第7層　明黄褐色土



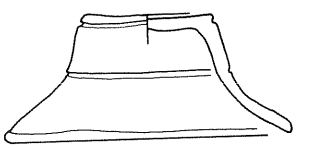


19号土坑

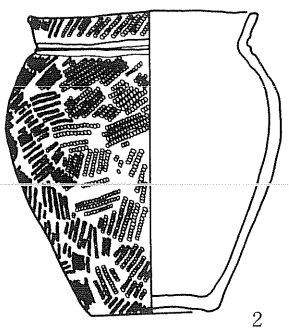




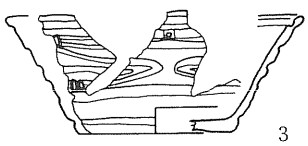
第5図　土坑



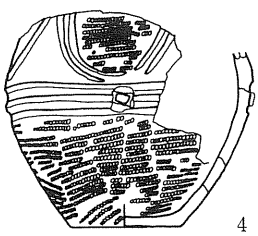
1



2

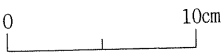


3

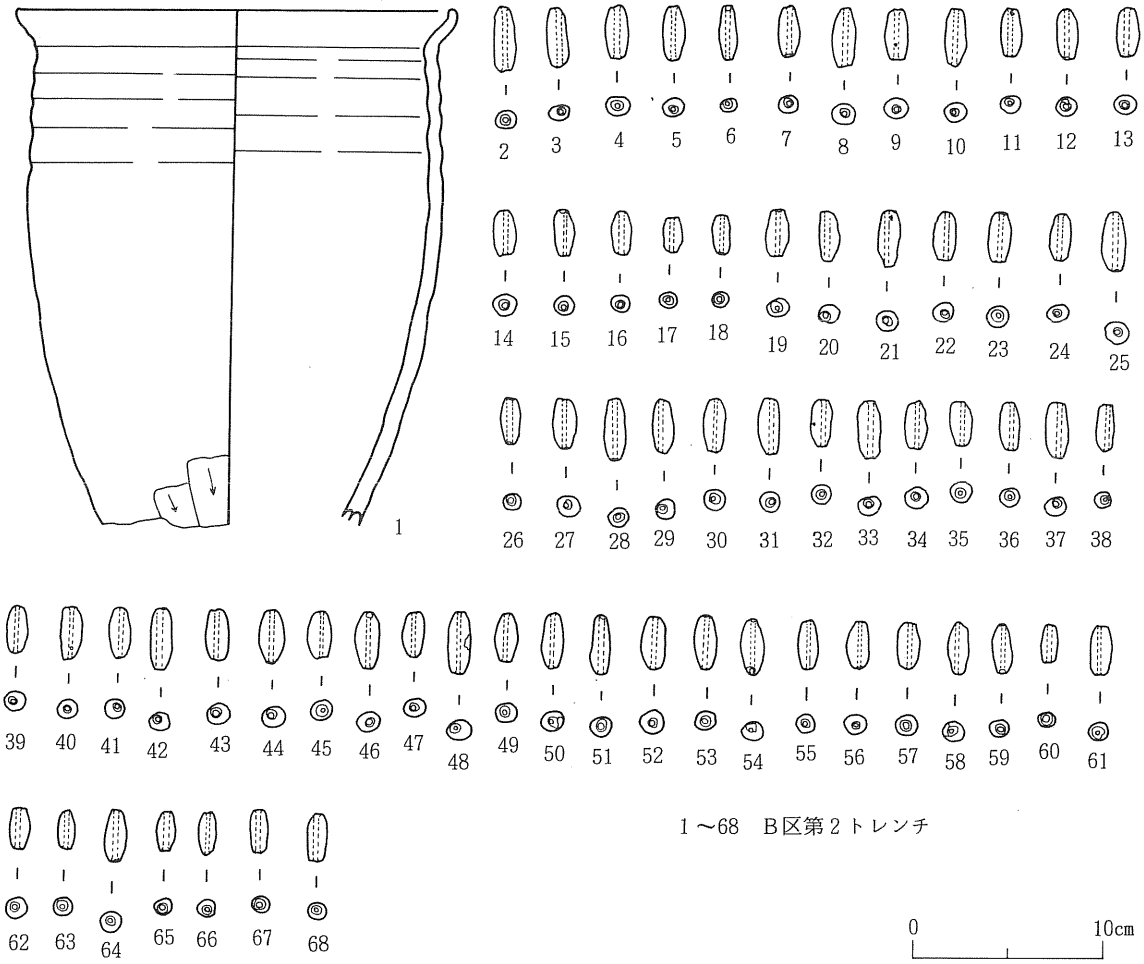


4

1・2　1号土坑
3　11号土坑
4　12号土坑



第6図　遺構内出土遺物



第7図　遺構外出土遺物

ま と め

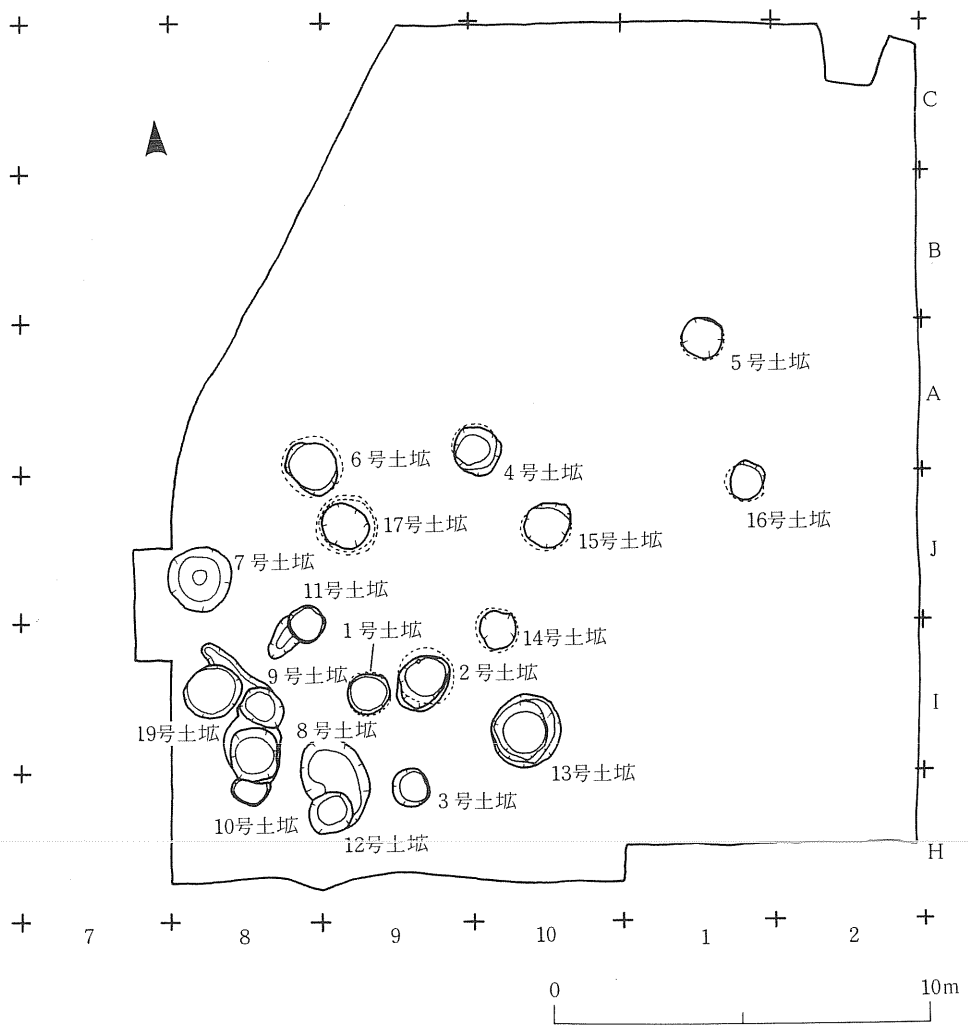
湯ノ沢Ⅰ遺跡ではAからK区まで調査を実施したがK区を除き遺構は検出されなかった。出土遺物も総数で整理箱2個程である。K区は小さく西に張出す狭少な台地であり、ここから弥生時代の土坑群が検出された。他の遺構はまったく認められなかった。この土坑の性格については不明である。ただ2号土坑は底部近くから、蓋と甕が出土しており、合せ口甕棺と思われることから、墓の可能性も考えられる。本遺跡と同様相を示す弥生時代の土坑群は沢を隔てた南約400mの沢ノ沢F遺跡でも認められる。

土坑内からは鉢形土器、甕形土器、蓋形土器などが出土している。変形工字文で連絡する頂点には、二個一対の小突起を施しているものなどがあり、湯ノ沢F遺跡と似た時期が考えられる。

参　考　文　献

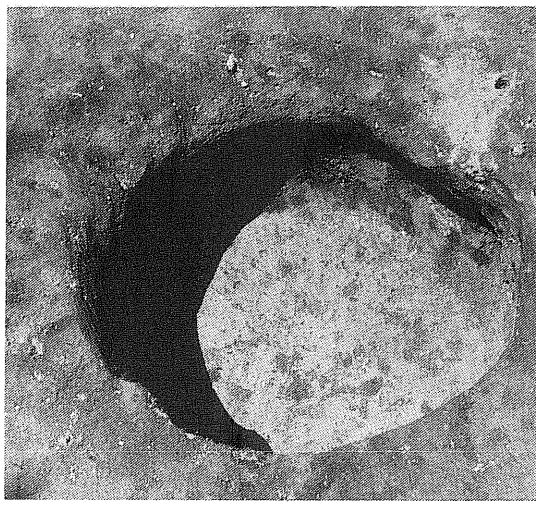
秋田教育委員会　：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984、1985

伊藤信雄、須藤隆：「瀬野遺跡ー青森県下北群脇野沢村瀬野遺跡の研究」東北考古学会、1982

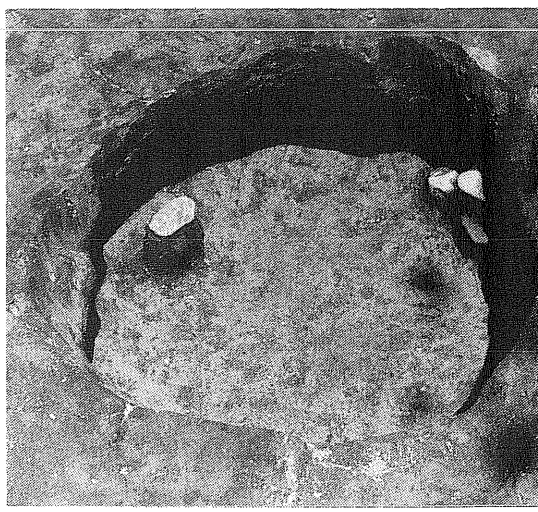


第8図　K区遺構配置図

遺跡全景（東→）



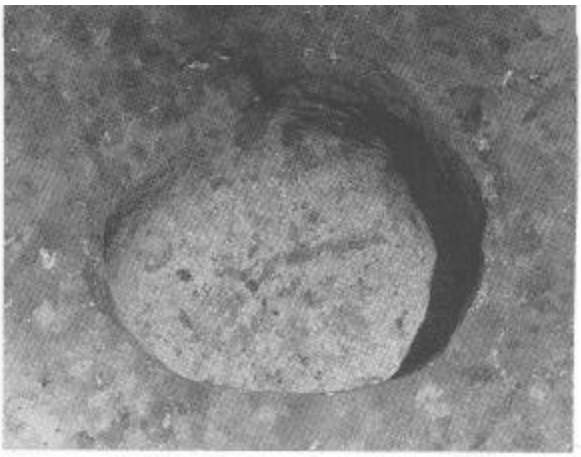
1号土坑



2号土坑

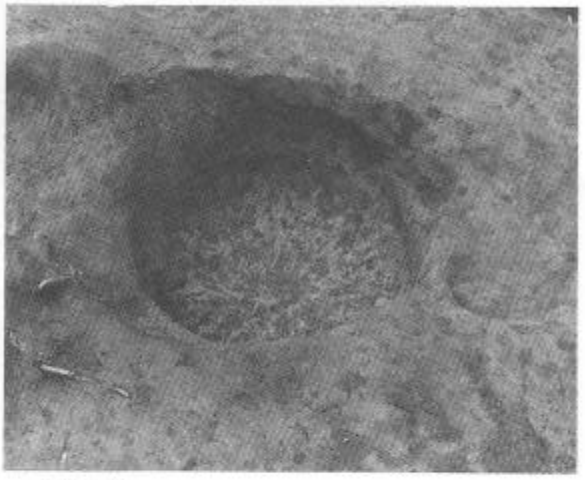
図版1

4号土坑



5号土坑

6号土坑

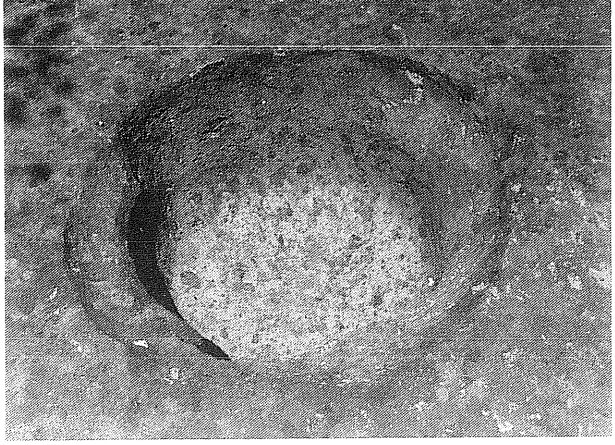


8号土坑

11号土坑

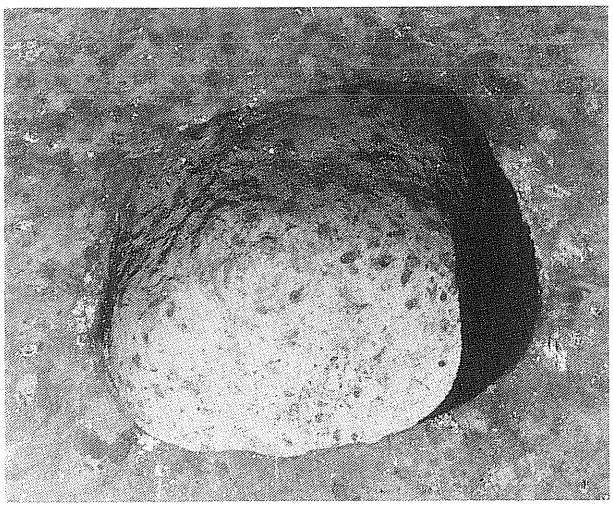
12号土坑

図版 2



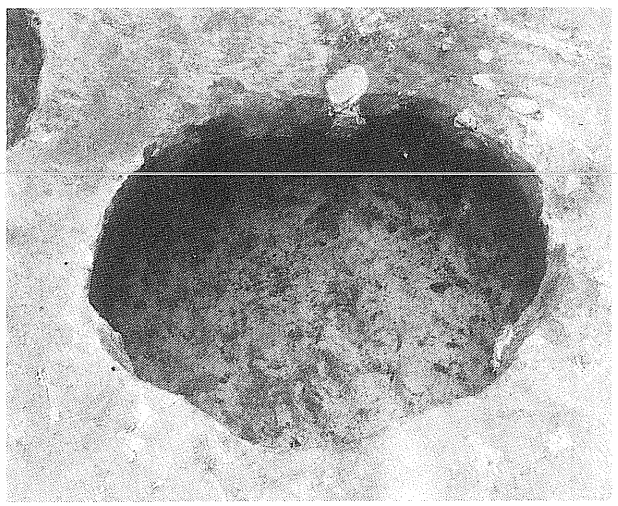
13号土坑

14号土坑

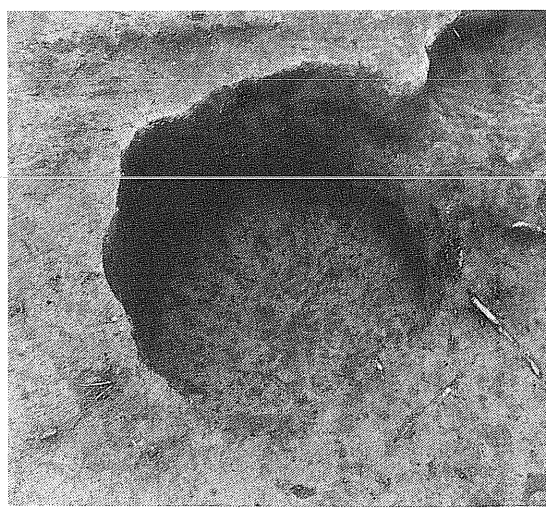


15号土坑

16号土坑

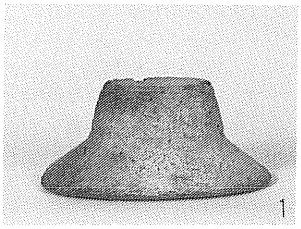


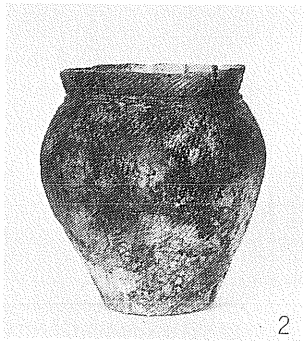
17号土坑

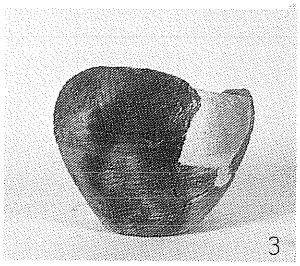


19号土坑

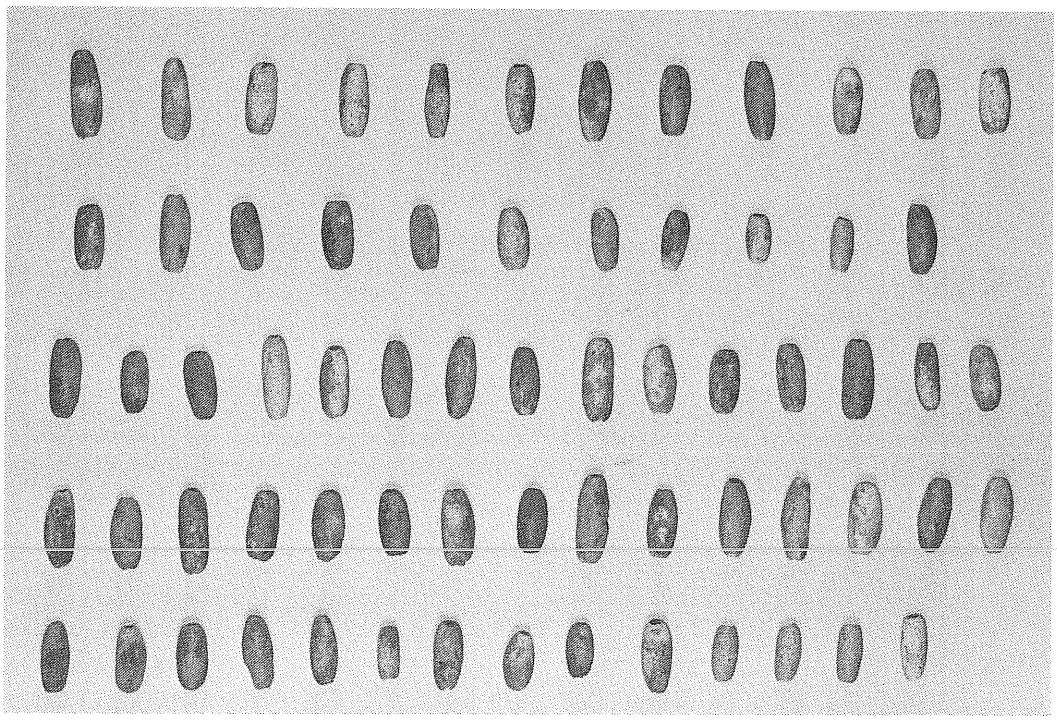
図版 3





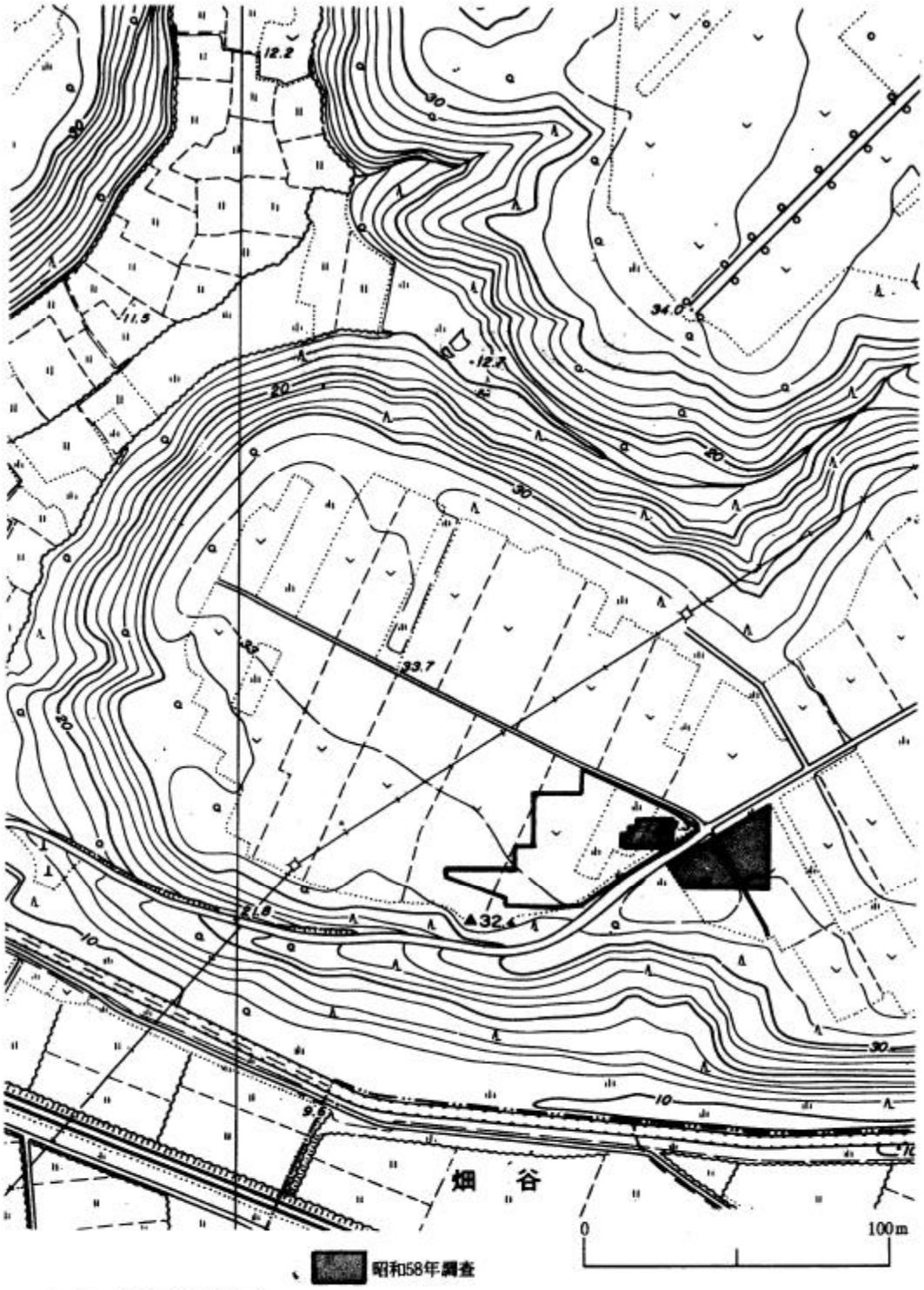


1～2　1号土坑
3　　12号土坑

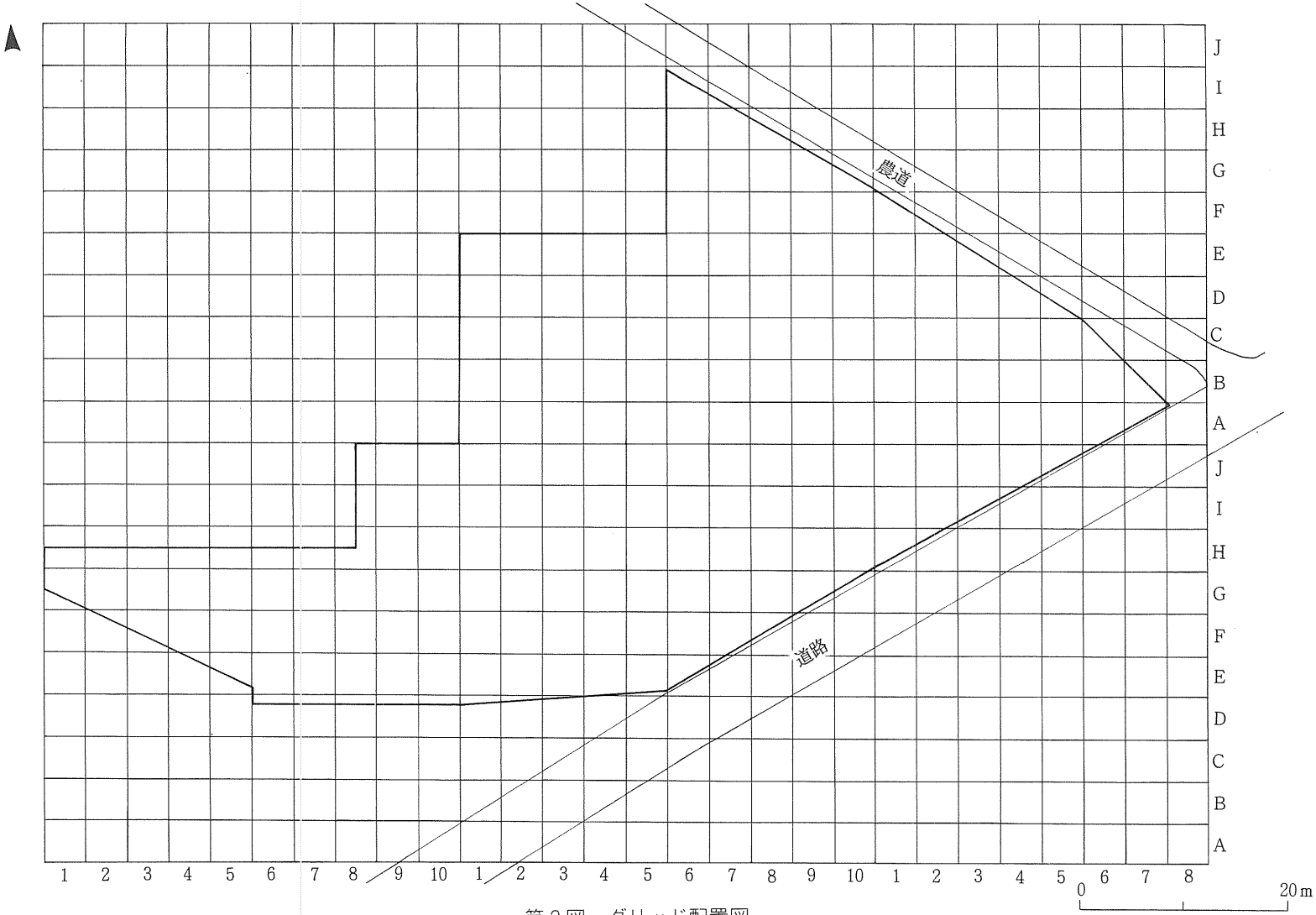


B区第2トレンチ

湯ノ沢Ｆ遺跡



第1図　遺跡周辺の地形



第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落から、御所野にぬける市道を東に400m程行った標高32mの西に大きく張り出す舌状台地の付け根部分に位置する。昭和58年度に一部調査を行い、主に平安時代の墓21基と鉄刀など多くの副葬品を検出している。今年度は、その全容を把握するため前回調査のできなかった範囲の発掘を行った。結果、新たに墓19基と土師器、須恵器、鉄刀などの副葬品、また弥生時代の土坑を検出した。

遺構と遺物

遺構

今回の調査で、弥生時代の土坑7基、平安時代の墓19基が検出された。これらの遺構については、表にしてまとめた。平安時代の墓については昭和58年度調査の番号を引き続き使用し、22号墓からとしたが、墓一覧表では前回調査の墓も掲載している。

土坑一覧表

項目 / 土坑番号	規模 (m) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物
1号	1.57	1.55	1.06	円形	フラスコ状	
2号	1.11	1.1	0.38	円形	鍋底状	第4図1・2
3号	1.45	1.4	1.16	円形	袋状	第4図3・4・7
4号	1.5	1.38	0.45	円形	袋状	第4図5・6
5号	1.73	1.5	0.89	円形	フラスコ状	
6号	1.0	0.9	0.43	円形	鍋底状	
7号	1.35	1.22	0.65	円形	ピーカー状	

弥生時代遺物

本遺跡で検出した弥生時代の7基の土坑のうち3基から遺物が出土した。以下に述べることにする。

2号土坑出土遺物（第4図）

土器：1・2は甕形土器である。1は内面の口縁および頸部に横方向の刷毛目がみられ、外面には横方向のカキ目を施した後に縄文を施している。地文はLRの横および斜方向の単節斜縄文である。2は器外面の摩滅により縄文はほとんど消滅している。

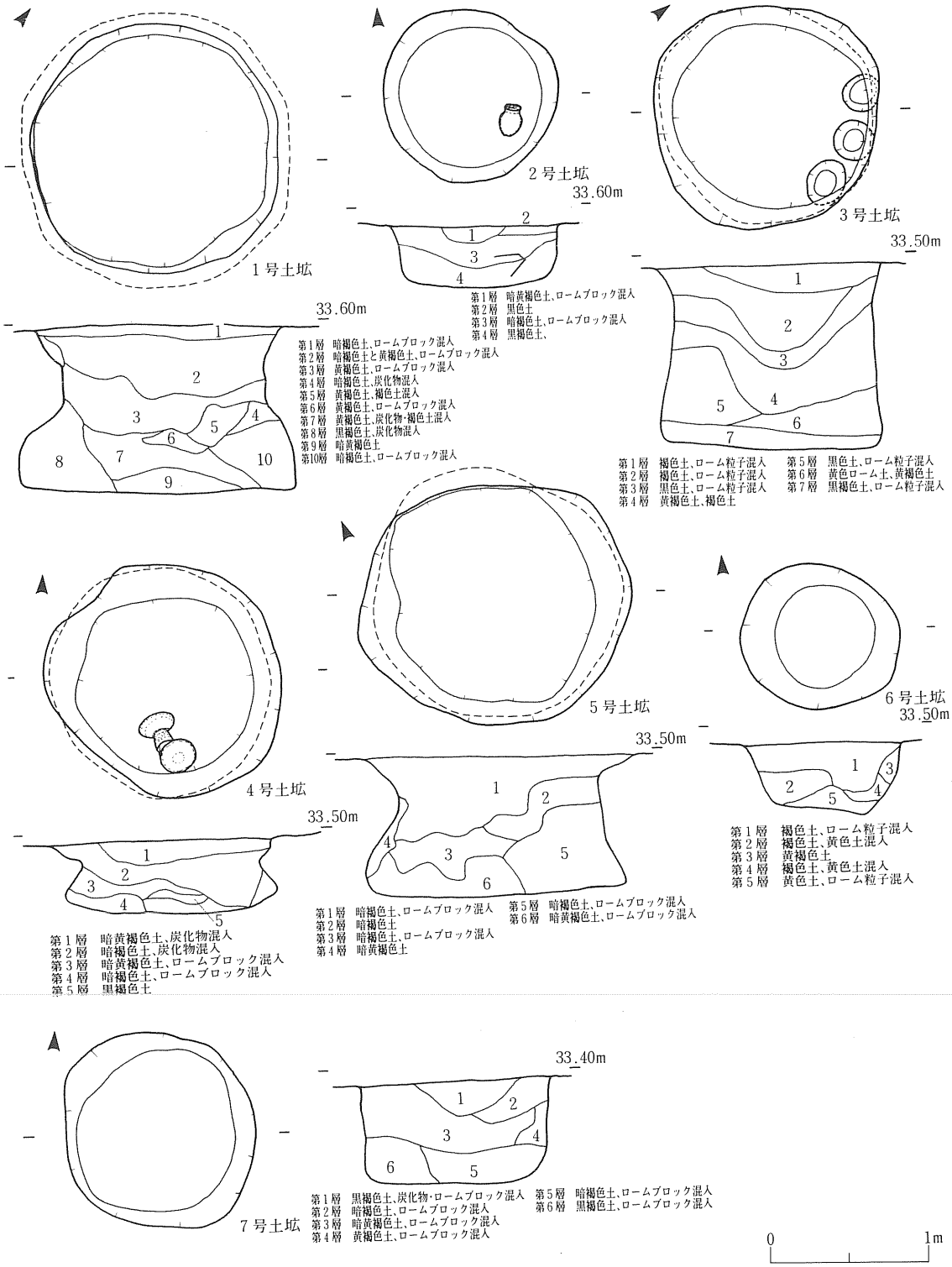
3号土坑出土遺物（第4図）

土器：3は鉢形土器である。外面の口縁部と胴部に二条の平行沈線を施し、その沈線間に鋸歯状の沈線文がまわる。地文は無節の縄文である。外面には部分的にベンガラが塗られている。内面には漆状の皮膜が貼りついている。

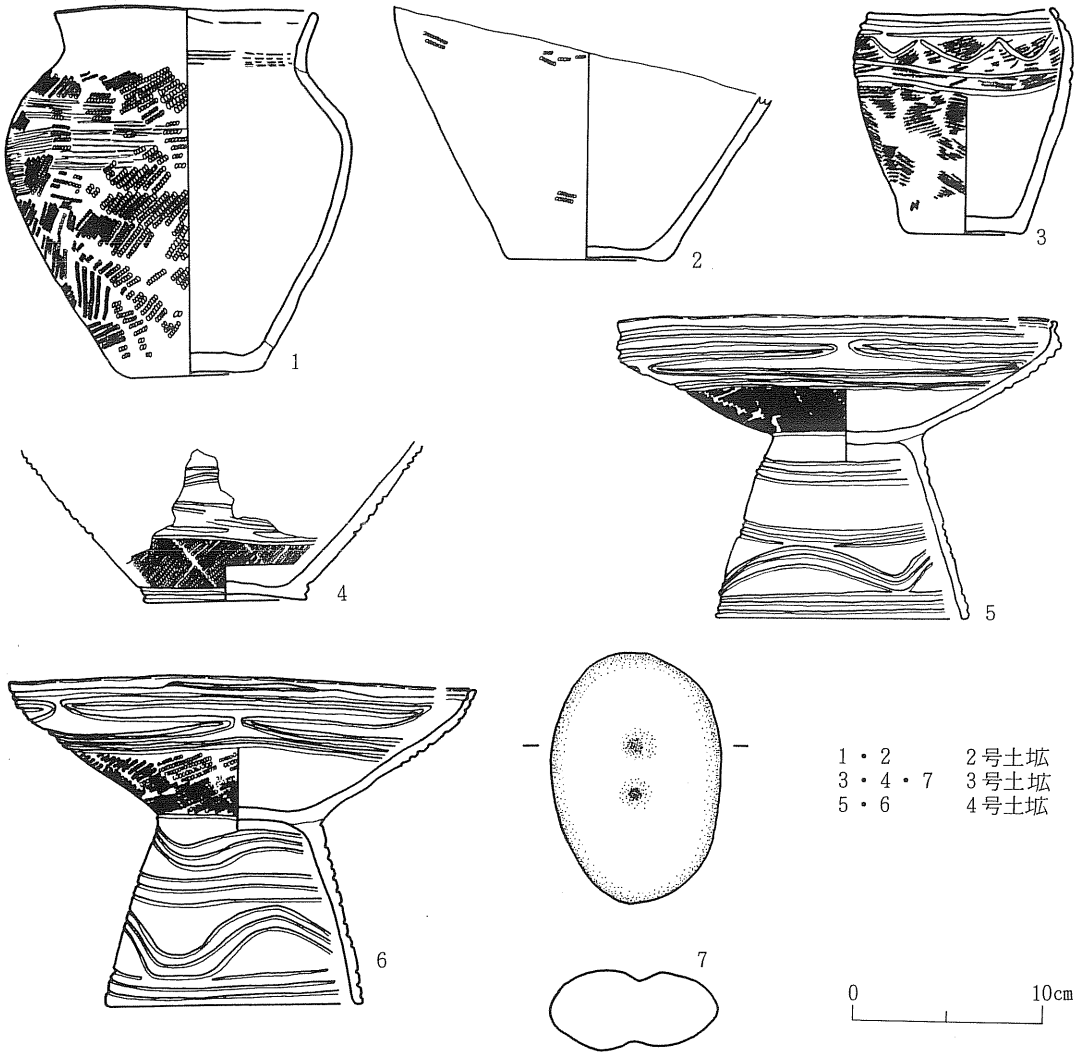
石器：7は凹石である。

4号土坑出土遺物（第4図）

土器：5・6は高坏形土器である。口縁部に二条あるいは一条の沈線がまわり、体部上半に変形工字文を施している。体部下半にはLRの横および斜方向の単節斜縄文が施されている。台部は高い脚部を有し、三条の平行沈線と波状文が施されている。いずれも内外面ともに磨きが施されている。


1 号土坑
2 号土坑
33.60m
第1層 暗黄褐色土、ロームブロック混入
第2層 黒色土
第3層 暗褐色土、ロームブロック混入
第4層 黒褐色土、
3 号土坑
33.50m
第1層 褐色土、ローム粒子混入
第2層 褐色土、ローム粒子混入
第3層 黒色土、ローム粒子混入
第4層 黄褐色土、褐色土
第5層 黒色土、ローム粒子混入
第6層 黄色ローム土、黄褐色土
第7層 黒褐色土、ローム粒子混入
33.60m
第1層 暗褐色土、ロームブロック混入
第2層 暗褐色土と黄褐色土、ロームブロック混入
第3層 黄褐色土、ロームブロック混入
第4層 暗褐色土、炭化物混入
第5層 黄褐色土、褐色土混入
第6層 黄褐色土、ロームブロック混入
第7層 黄褐色土、炭化物・褐色土混入
第8層 黒褐色土、炭化物混入
第9層 暗黄褐色土
第10層 暗褐色土、ロームブロック混入
4 号土坑
33.50m
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 暗褐色土、炭化物混入
第3層 暗黄褐色土、ロームブロック混入
第4層 暗褐色土、ロームブロック混入
第5層 黒褐色土
5 号土坑
33.50m
第1層 暗褐色土、ロームブロック混入
第2層 暗褐色土
第3層 暗褐色土、ロームブロック混入
第4層 暗黄褐色土
第5層 暗褐色土、ロームブロック混入
第6層 暗黄褐色土、ロームブロック混入
6 号土坑
33.50m
第1層 褐色土、ローム粒子混入
第2層 褐色土、黄色土混入
第3層 黄褐色土
第4層 褐色土、黄色土混入
第5層 黄色土、ローム粒子混入
7 号土坑
33.40m
第1層 黒褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第2層 暗褐色土、ロームブロック混入
第3層 暗黄褐色土、ロームブロック混入
第4層 黄褐色土、ロームブロック混入
第5層 暗褐色土、ロームブロック混入
第6層 黒褐色土、ロームブロック混入
0
1m

第3図　土坑



第４図　遺構内出土遺物

平安時代遺物

22号墓出土遺物（第10図）

土器：１は底部切り離しが回転糸切り無調整の土師器杯である。内面は黒色処理を施しており、口縁部から体部は横方向、底部は放射状のミガキを施している。焼成は良好である。２は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。口縁部がわずかに外反する。焼成良好である。

鉄製品：３・４は刀子の破損である。２は茎に木質部が残っている。

25号墓出土遺物（第10・15図）

土器：５・６は須恵器長頸壺である。同一個体であるが接合しない。５は底径10.8cm、現存高20cmを計る。底部切り離しは不明であるが低い高台を貼り付け後、周縁にナデを施している。体下半部には回転ヘラケズリ、体中央部には手持ちのヘラケズリ調整を施している。焼成良好である。

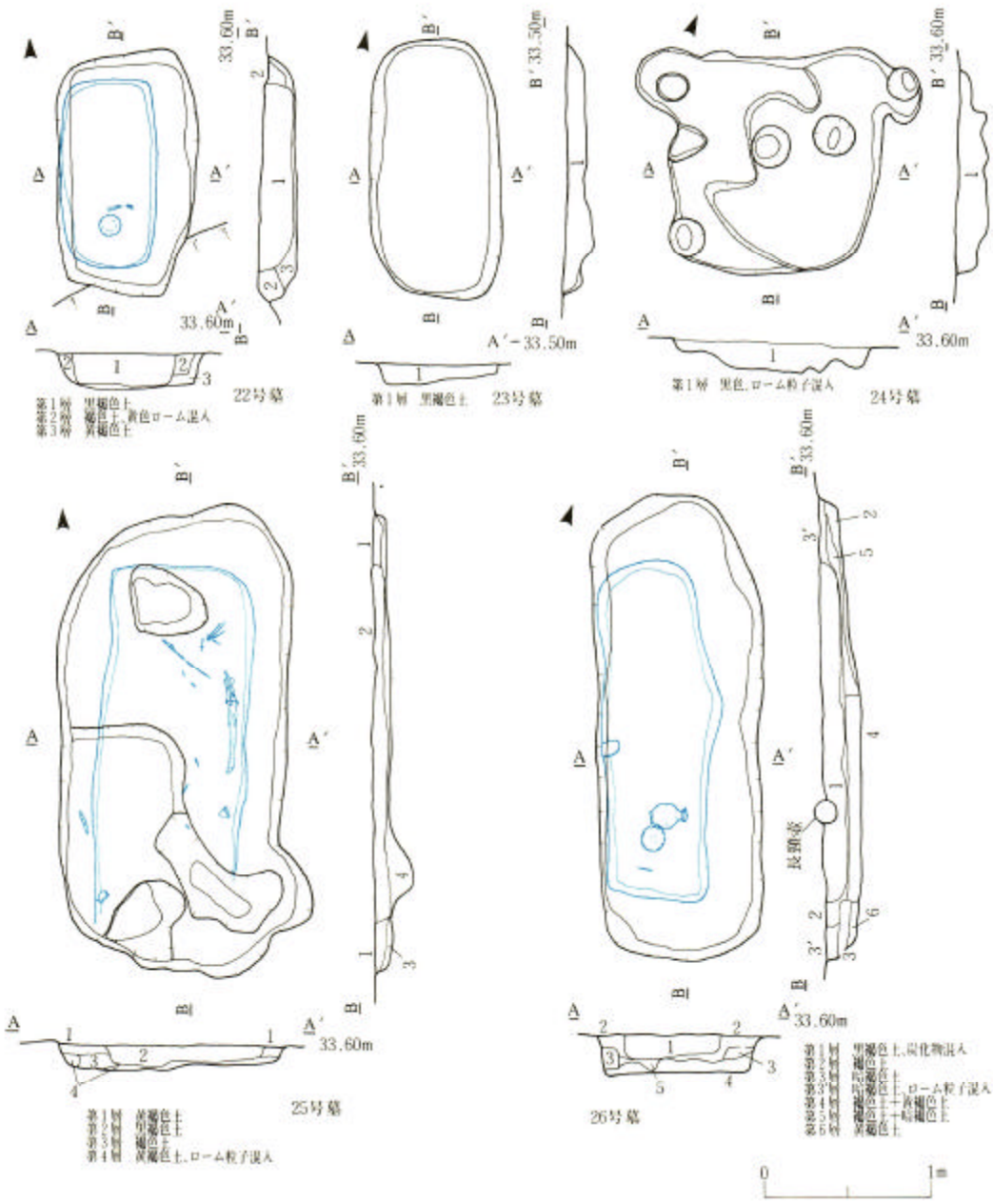
鉄製品：第15図１は蕨手刀である。平造りのもので全長55cm、刃長40.8cmを計る中寸刀である。

平 安 時 代 墓 一 覧 表

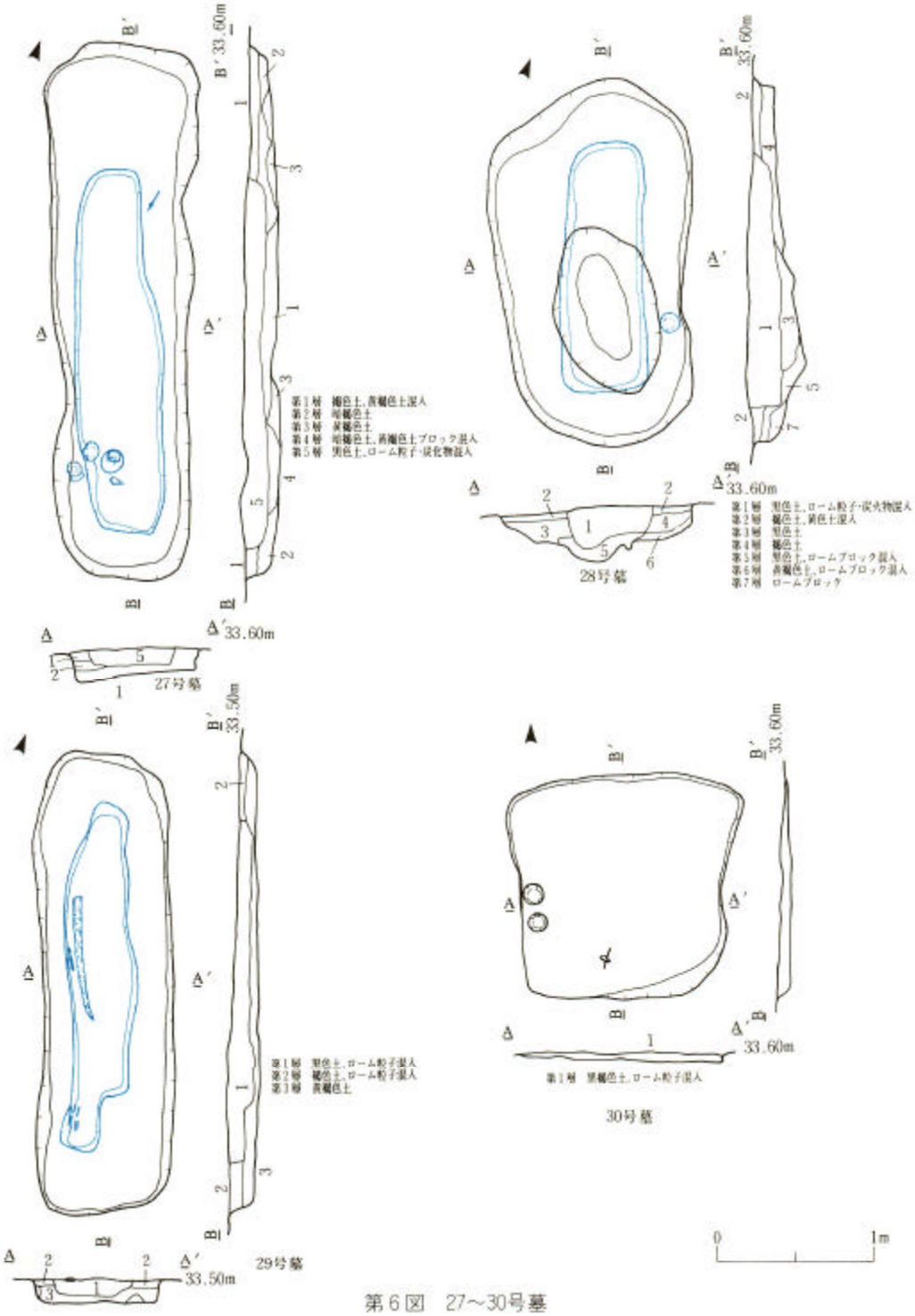
項目 / 墓番号	規模（m） 長軸 × 短軸		深さ（m）		長軸方向	形状	副葬品	備考
	掘り方	木棺	掘り方	木棺				
1	2.74 × 1.24		0.20		N 11° W	隅丸長方形	漆皮、紡錘車	中央部溝により攪乱
2	3.1 × 1.44		0.34		N 8° W	長円形	須恵器、鉄刀、刀子	
3	3.56 × 1.26	2.7 × 0.7	0.44		N	隅丸長方形	赤褐色土器、鉄刀、鉄鏃、馬具	木棺の痕跡あり、幅70cm 長さ2.7m
4	2.98 × 1.23	? × 0.68	0.32		N 32° W	隅丸長方形	赤褐色土器坏、鉄刀1、刀子2、鉄鏃1	木棺の痕跡あり、幅68cm 長さ不明
5	3.08 × 1.42		0.28		N 15° W	隅丸長方形	刀子1、鉄鏃9点以上	北側攪乱
6	2.76 × 1.12		0.26		N 19° W	隅丸長方形	漆皮箱、馬具	
7	3.0 × 1.2		0.32		N 16° W	隅丸長方形	内黒土師器、鉄鏃、鉄刀、不明鉄製品	鉄刀に骨片付着
8	3.1 × 1.4		0.18		N 13° W	隅丸長方形	赤褐色土器坏、鉄刀1、刀子	北部攪乱
9	2.2 × 1.34		0.24		N 1° W	長円形	赤褐色土器片	南、北西部攪乱
10	2.56 × 1.02	1.8 × 0.7	0.74 (最深部)		N 2° W	長円形	赤褐色土器坏	木棺の痕跡あり、幅70cm 長さ1.8m
11	1.46 × 0.94		0.30		N 26° W	長円形		
12	2.94 × 1.1		0.30		N 8° E	隅丸長方形		
13	2.1 × 1.94		0.40		N	隅丸長方形	刀子、紡錘車	
14	2.9 × 1.7		0.20		N 10°30′ W	隅丸長方形	赤褐色土器坏、鉄刀、刀子	北側攪乱
15	4.10 × 1.48		0.18		N 1° W	隅丸長方形	刀子	
16	3.64 × 1.06		0.14		N 24° W	隅丸長方形	内黒土師器、鉄刀、鉄鏃、鉄鎌、鋤先、不明鉄製品、帯金具、銭貨	上部削平
17	3.64 × 1.3		0.35		N 8° E	隅丸長方形	鉄鏃	上部削平
18	1.94 × 0.68		0.10		N 1° W	隅丸長方形		上部削平
19	2.1 × 0.66		0.10		N 18° W	長円形	鉄刀1、刀子1	上部削平
20	3.0 × 1.1	2.2 × 0.5	0.24		N 16° E	隅丸長方形	赤褐色土器、刀子	木棺の痕跡あり、幅50cm 長さ2.2m

項目 / 墓番号	規模（m）長軸×短軸		深さ（m）		長軸方向	形状	副葬品	備考
	掘り方	木棺	掘り方	木棺				
21	2 m以上×0.9		0.26		N	隅丸長方形	赤褐色土器、刀子、紡錘車	南側土手のため不明
22	1.42×0.82	1.12×0.6	0.22	0.2	N 3°E	隅丸長方形	内黒土師器坏、赤褐色土器坏	北側攪乱
23	1.52×0.78		0.15		N 13°W	隅丸長方形		
24	1.28×1.27		0.18		N 14°W	不整形		
25	2.82×1.36	2.13×0.88	0.15	0.12	N 1°W	長円形	長頸壺、鉄鏃、鉄刀、刀子	蕨手刀
26	2.78×0.98	2.04×0.66	0.24	0.15	N 20°W	隅丸長方形	長頸壺、赤褐色土器坏、刀子	長頸壺の底部…菊花状文
27	3.4×0.91	2.3×0.57	0.25	0.18	N 21°W	隅丸長方形	長頸壺、赤褐色土器坏	
28	2.31×1.23	1.58×0.52	0.37	0.23	N 21°W	長円形	赤褐色土器坏	
29	2.9×0.83	2.24×0.45	0.22	0.18	N 20°W	隅丸長方形	鉄刀、鉄鏃	
30	1.43×1.27				N 1°W	不整形	赤褐色土器坏、紡錘車	
31	2.08×1.25	1.51×0.48	0.17	0.10	N 1°W	長円形	赤褐色土器坏、鉄鏃、刀子	
32	2.79×0.87	2.32×0.56	0.17	0.08	N 6°W	隅丸長方形	鉄刀、馬具	鐔…鉄十字透鐔
33	2.42×0.85以上	1.8×0.5	0.15	0.1	N 3°E	長円形	赤褐色土器坏	35号墓によって東側が切られている
34A	3.0以上×2.7	2.6以上×0.67	0.22	0.2	N 2°W	隅丸長方形	刀子、内黒土師器坏	棺材（？）検出、南側削平。34Aより頭蓋冠・顔面骨・上肢骨出土
B		2.05以上×0.62	0.22	0.15	N 7°W			
35	2.55×1.05	2.12×0.6	0.17	0.13	N 2°E	長円形	刀子	
36A	2.2以上×2.3	1.63以上×0.53	0.2	0.11	N 8°W	隅丸長方形	鉄刀2、刀子、鉄鏃、石帯（丸鞆1、巡方4）	南側削平
B		1.4以上×0.53	0.17	0.11	N 2°W		紡錘車	
37	1.0以上×1.3	0.8以上×0.7	0.27	0.18	N 8°W	隅丸長方形		裏込め下部に炭化物
38	0.6以上×1.0	0.6以上×1.0	0.23	0.18	N 21°W	長円形		

1号～21号墓は昭和59年度調査済

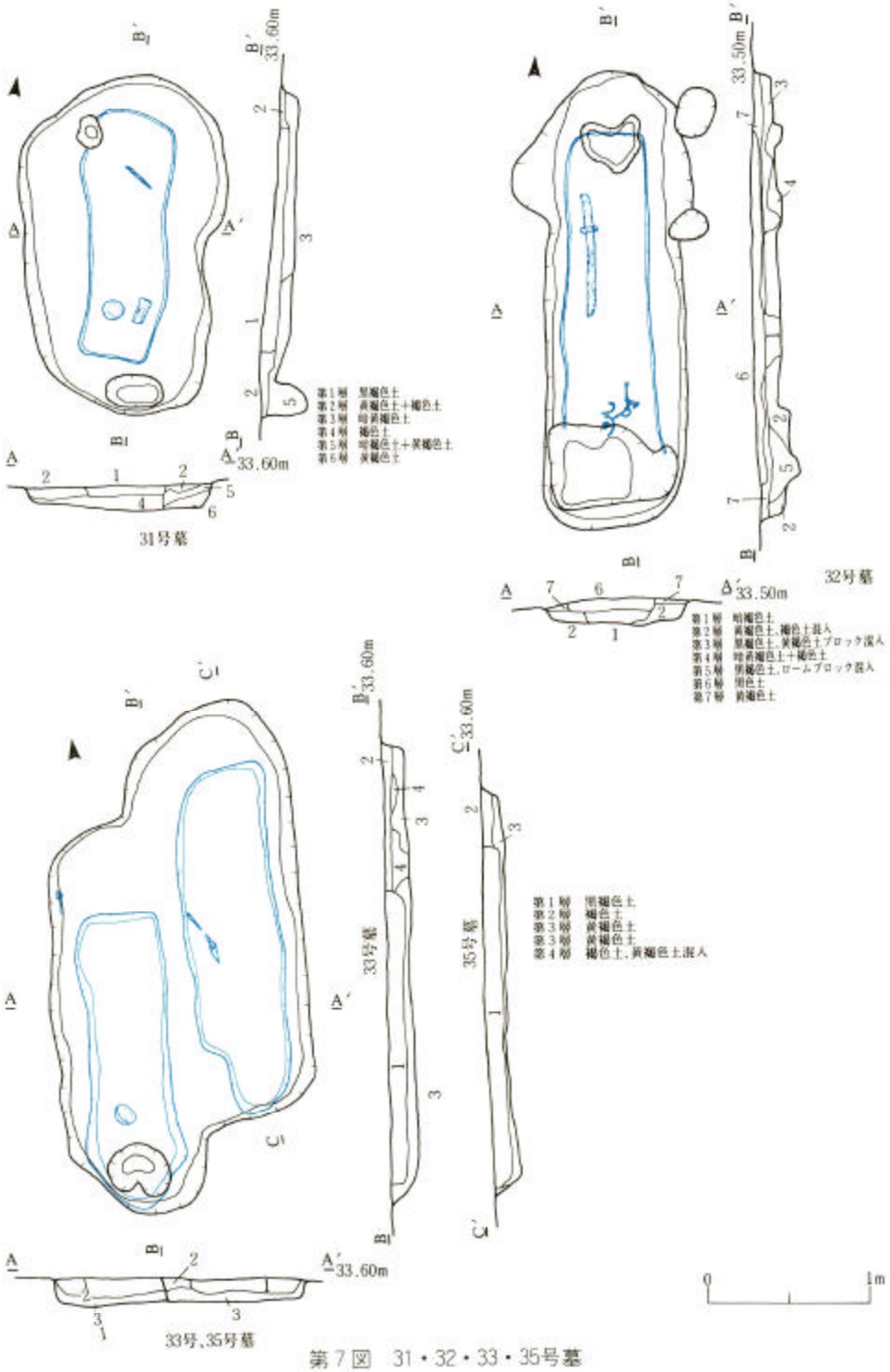


第5図　22～26号墓

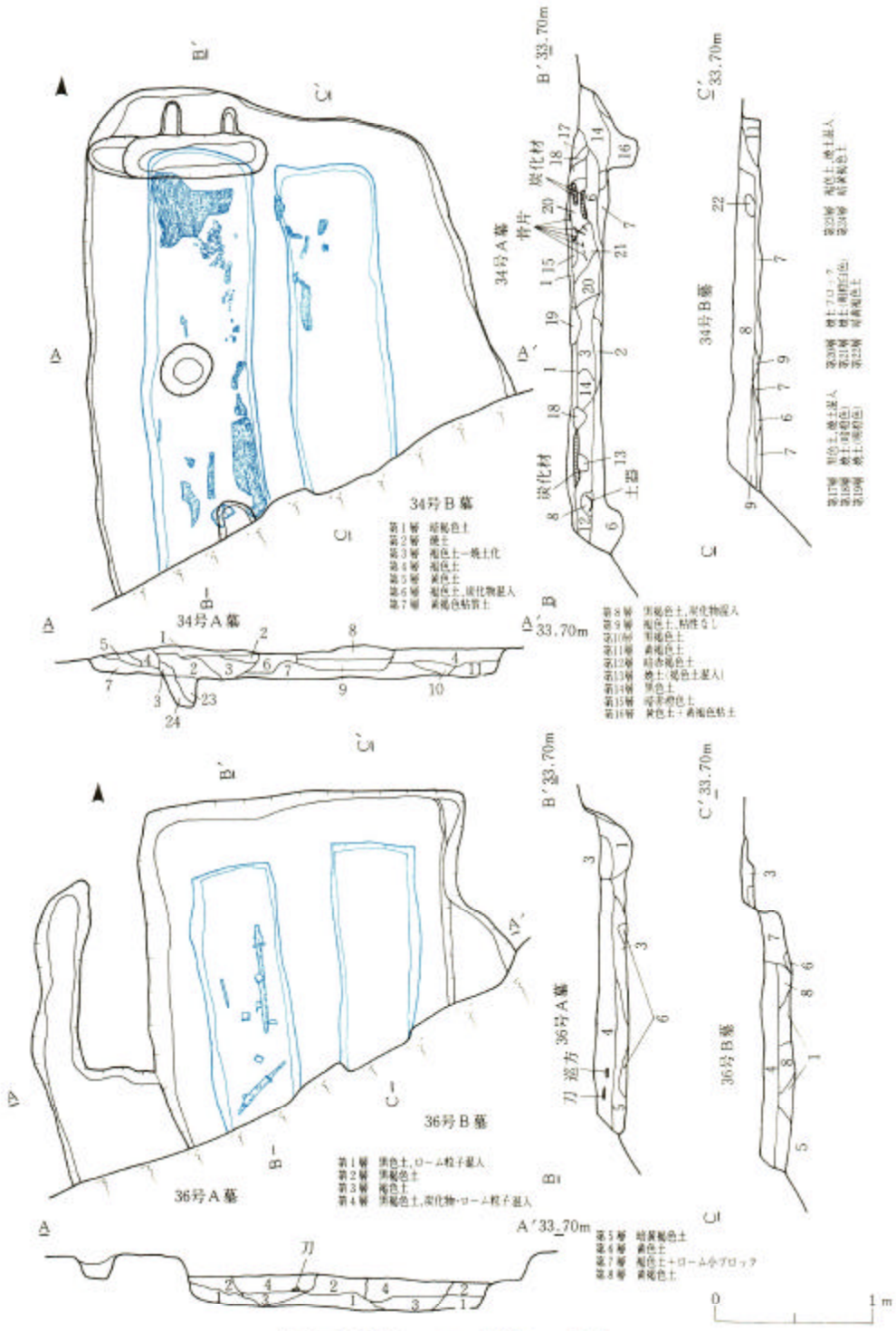


27号墓
28号墓
29号墓
30号墓
33.60m
33.50m
第1層　褐色土、黄褐色土混入
第2層　暗褐色土
第3層　黄褐色土
第4層　暗褐色土、黄褐色土ブロック混入
第5層　黒色土、ローム粒子・炭化物混入
第1層　黒色土、ローム粒子・炭火物混入
第2層　褐色土、黄色土混入
第3層　黒色土
第4層　褐色土
第5層　黒色土、ロームブロック混入
第6層　黄褐色土、ロームブロック混入
第7層　ロームブロック
第1層　黒色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
0
1m

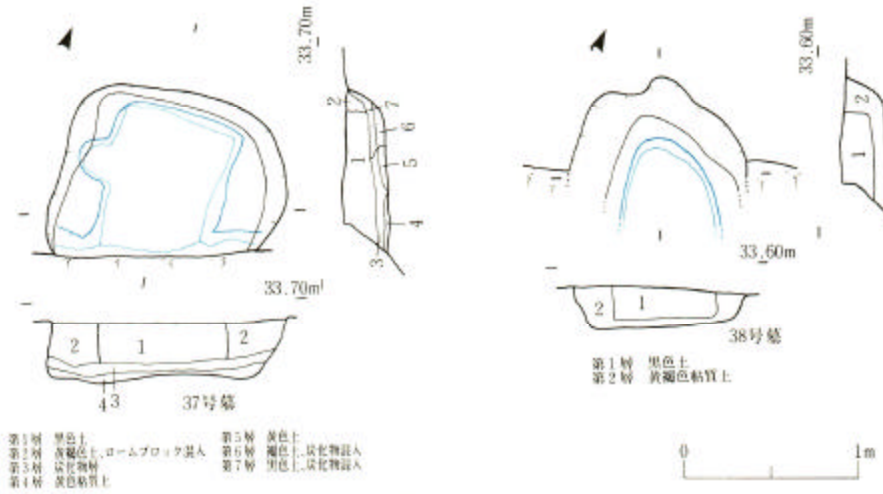
第6図　27～30号墓



第7図　31・32・33・35号墓



第8図　34号A・B・36号A・B墓



第9図　37・38号墓

「鋒つく」でカマス切先である。鍔は、はみ出し鍔で絞り小判型で、柄先の形は半月形を呈する。柄の絞りはつよい。区は判然としない。鞘木片が残存している。全体に錆化が著しい。7・8は刀子である。7は全長14.8cm、刃長7.2cmである。茎に一部木質が残存している。8は一部欠損しているが同様に木質が付着している。鉄鏃は9個出土した。いずれも茎、先端部の一部が欠損している。9は現長13.4cmの雁股の鏃である。茎に一部木質部が付着する。10・13・14・16・19・の茎にも木質部が付着している。

26号墓出土遺物（第11図）

土器：18は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部からゆるく内湾しながら口縁部に至る。焼成良好である。20は須恵器長頸壺である。口縁部は欠損している。頸部から肩部にかけて丸みをおびながら底部に至る。底部は回転糸切りである。糸切り後に体下端および底部をつまみ出し低い高台をつけている。その結果菊花状の文様がみられる。周縁にはナデを施し整形している。

鉄製品：19は刀子破片である。非常に小型のもので刃長2.5cmである。茎に木質部が付着している。

27号墓出土遺物（第11図）

土器：21・22は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部から21は内湾、22は直線的に口縁部に至る。いずれも焼成は良好である。23は須恵器長頸壺である。口径6.6cm、底径7.2cm、器高15.5cmを計る。底部は回転糸切りである。低い高台を貼付後、周縁にナデを施し整形している。焼成は良好である。

鉄製品：24は刃先の欠損する刀子である。茎に木質部が付着している。

28号墓出土遺物（第11図）

土器：25は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。口径に比して底径が非常に小さい。底部から直線的に口縁部に至る。焼成は良好である。26は小型の土師器甕である。ゆるく内湾しながら直線的に口縁部に至る。焼成は良好である。26は小型の土師器甕である。ゆるく内湾しながら口縁部に向かい、口縁はわずかに外反する。外面は縦、内面は横方向にカキ目痕がみられる。

29号墓出土遺物（第11・15図）

鉄製品：27は刃の一部が欠損する刀子である。茎には柄の木質部が残存している。28～35は鉄鏃である。28は、全長14.5cmを計る。先端部は扁平で鋭利である。他は破片であるが29・32・35・は茎に木質部が残存している。第15図２は鉄刀である。全長75cm、刃長57cm、身巾3.6cmを計る。切先は、「鋒つく」でカマス切先である。茎にハバキ金がみられる。刃部は直線的であるが柄は急に上方へ反る。目貫穴がみられる。全体に錆化が著しい。

30号墓出土遺物（第12図）

土器：36～38は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。いずれも底部からゆるく湾曲しながら口縁部に至り、口縁はわずかに外反する。焼成は良好である。36の体部に漆状の付着が認められる。

鉄製品：39は身先端部破片の鉄鏃である。40は現長1.9cmの鉄釘である。41は紡錘車である。紡輪径6cm、紡茎長8.4cmを計る。紡径の両端は欠損している。錆化が著しい。

31号墓出土遺物（第12図）

土器：42は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部から内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。焼成良好である。

鉄製品：43は現長13cmを計る刀子である。切先と茎の一部は欠損している。茎には木質部が残存している。44は鉄斧である。長さ14cm、巾5.7cmを計る。柄をうける部分は鉄板を折り曲げてつくっている。錆化が著しい。

32号墓出土遺物（第12・16図）

鉄製品：45～50は用途不明の製品である。45・46は木質が付着し、上部から釘が打たれている。これらは馬具の一部とも考えられる。51・52は馬具の轡部である。左右の鏡板とハミである。錆化が著しい。第16図５は鉄刀である。全長74.7cm、刃長53.3cm、身巾1.0cmを計る。切先は、「鋒つく」でカマス切先である。茎に鉄十字透かし鍔が明瞭に残存している。柄は上方に反り、中央部が少しくぼんでいる。柄の反りに比して刃部は直線的である。

33号墓出土遺物（第13図）

土器：53は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部から外反しながら立ち上がり、その後内湾しながら口縁に至る。焼成は良好である。

鉄製品：54は刀子である。切先は欠損している。全体に錆化が著しく、部分的に「ふくれ」がある。

34号Ａ墓出土遺物（第13図）

土器：55・56は、内面黒色処理を施した土師器杯である。いずれも回転糸切り無調整で、内面体部は横方向、底部には放射状の「ミガキ」がみられる。

35号墓出土遺物（第13図）

鉄製品：57は刀子である。切先は欠損している。全体に錆化が著しい。茎には木質部が残存している。

36号Ａ・Ｂ墓出土遺物（第13・16図）

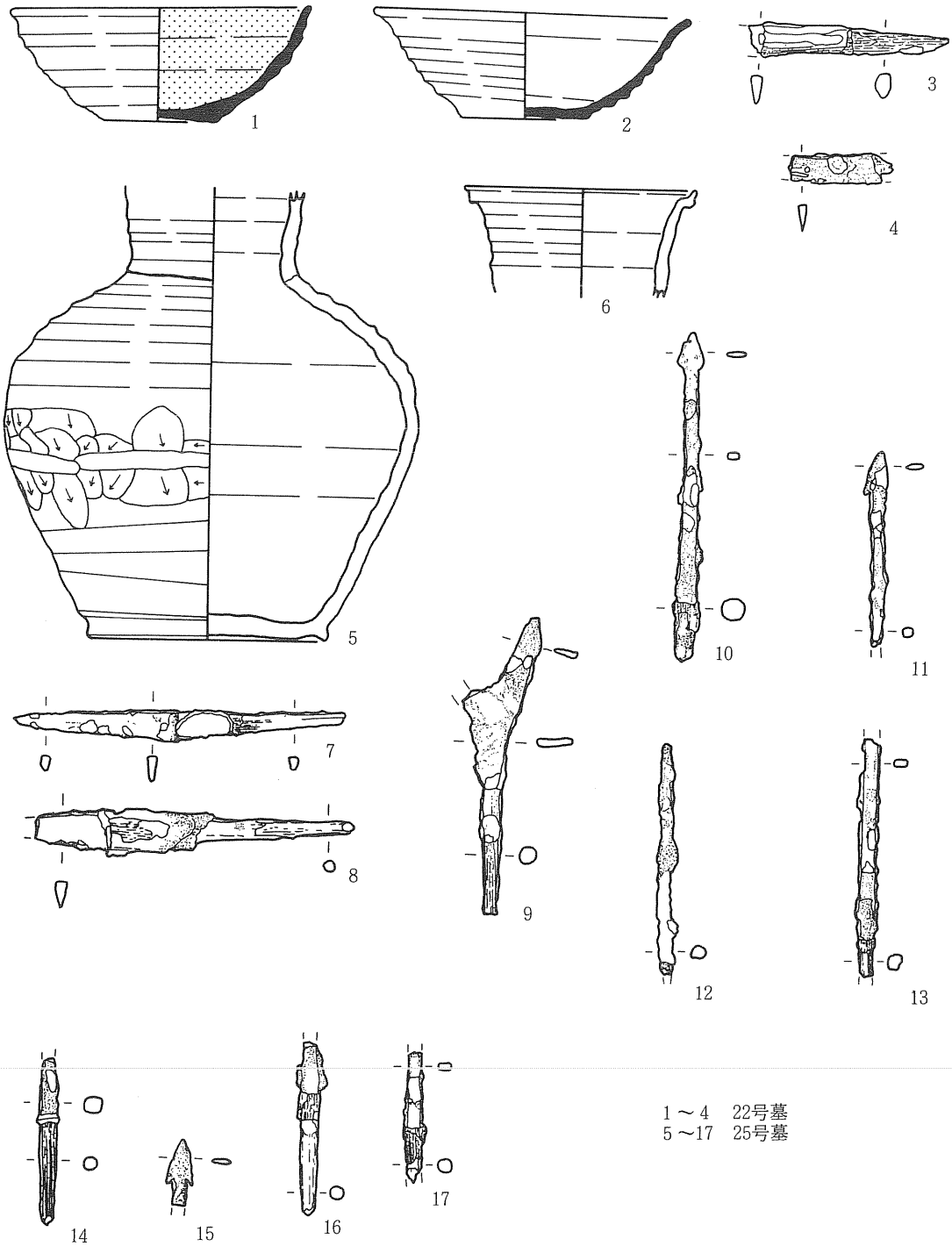
土器：埋土上面から出土した。58は土師器の小型壺と思われる。口縁部がわずかに外反する。胎土中には小石粒が多く含まれ、焼成はやや不良である。

鉄製品：59は刀子である。茎の一部は欠損するが、木質部が残存している。60は大形の鉄鏃である。全長14.5cmを計る。身は扁平である。66はＢ墓から出土した紡錘車である。紡輪径5.5㎝、紡径長19.3cmを計る。紡径の両端は欠損している。全体に錆化が著しい。第16図３・４は鉄刀である。69は全長66.2cm、刀身53cm、身巾約0.7㎝を計る。刀身は直線的である。銅製の脛金、鍔が良好に残存している。また柄の二ヶ所に目貫穴があり、一ヶ所に銅製の飾り金具がみられる。鞘の木質部が残存しており、足金具、佩鐓が良好に残っている。70は全長43.2cm、刀身39cm、身巾約1.0㎝を計る。切先は「鋒つく」でカマス切先である。茎には「脛金」が残存している。全体に錆化が著しい。

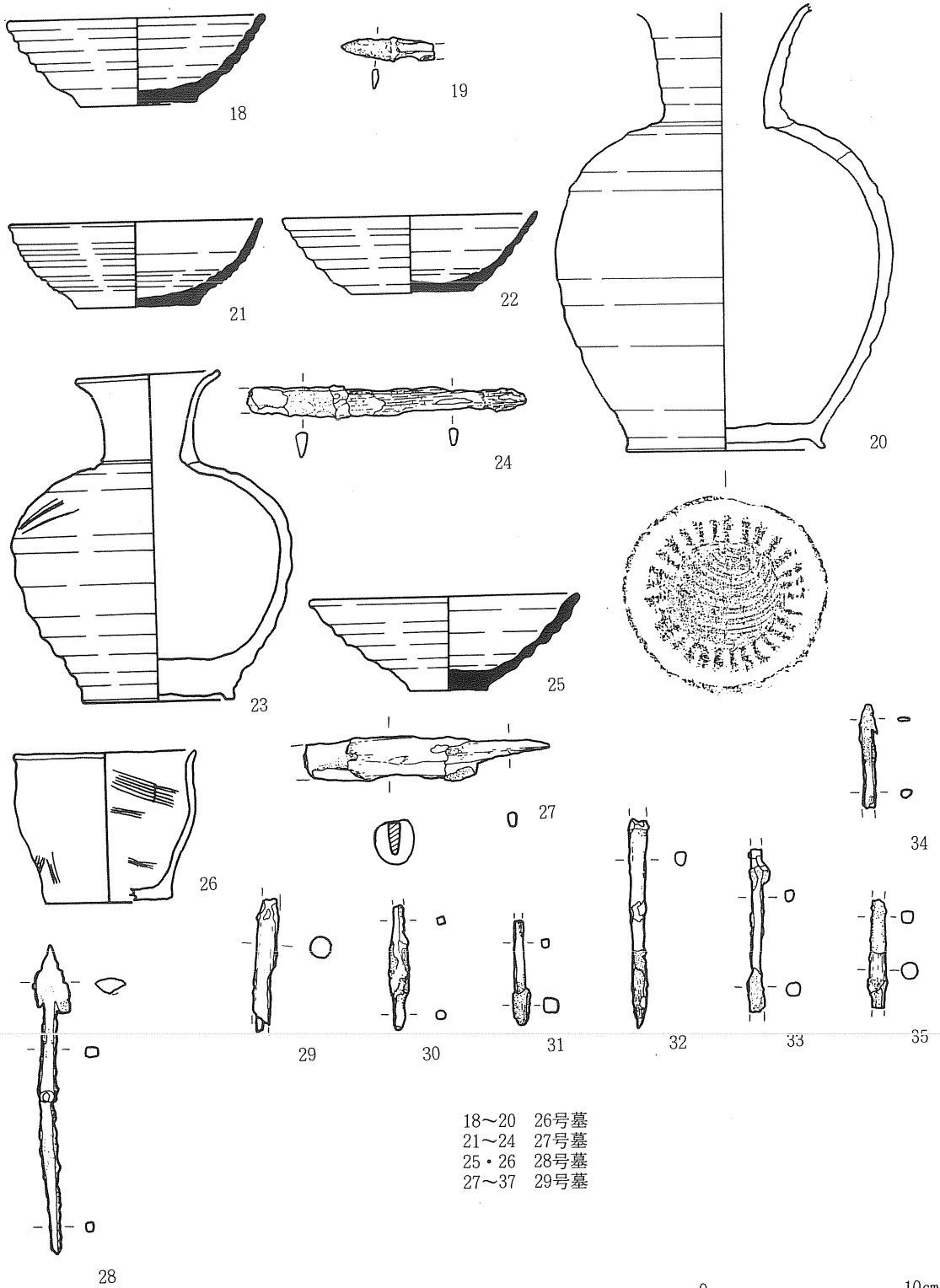
石製品：61～65は石帯である。巡方４点、丸鞆１点が出土した。巡方は一辺がおおむね4.1～4.2㎝、厚さ0.55cmである。裏面の４ヶ所には一対の小孔がある。68は丸鞆である。長さ3.7㎝、厚さ0.6cmである。裏面の３ヶ所には一対の小孔がある。巡方、丸鞆とも表裏に黒色の漆状の付着物がみられる。

遺構外出土遺物（第16図）

１は土師器の小形壺形土器で、内面にきれいなカキ目を施している。２は須恵器の壺形土器で、長頸壺と思われる。外面には横方向に回転ヘラケズリを施し、後に手持ちヘラケズリを施している。３～12は鉄鏃である。３～７は扁平で鋭利な先端部、８～12は茎の部分で、矢柄の木質が残存している。13は表採資料の鉄斧である。14は紡錘車である。紡輪径5.5㎝、紡径10cmを計る。いずれも欠損している。

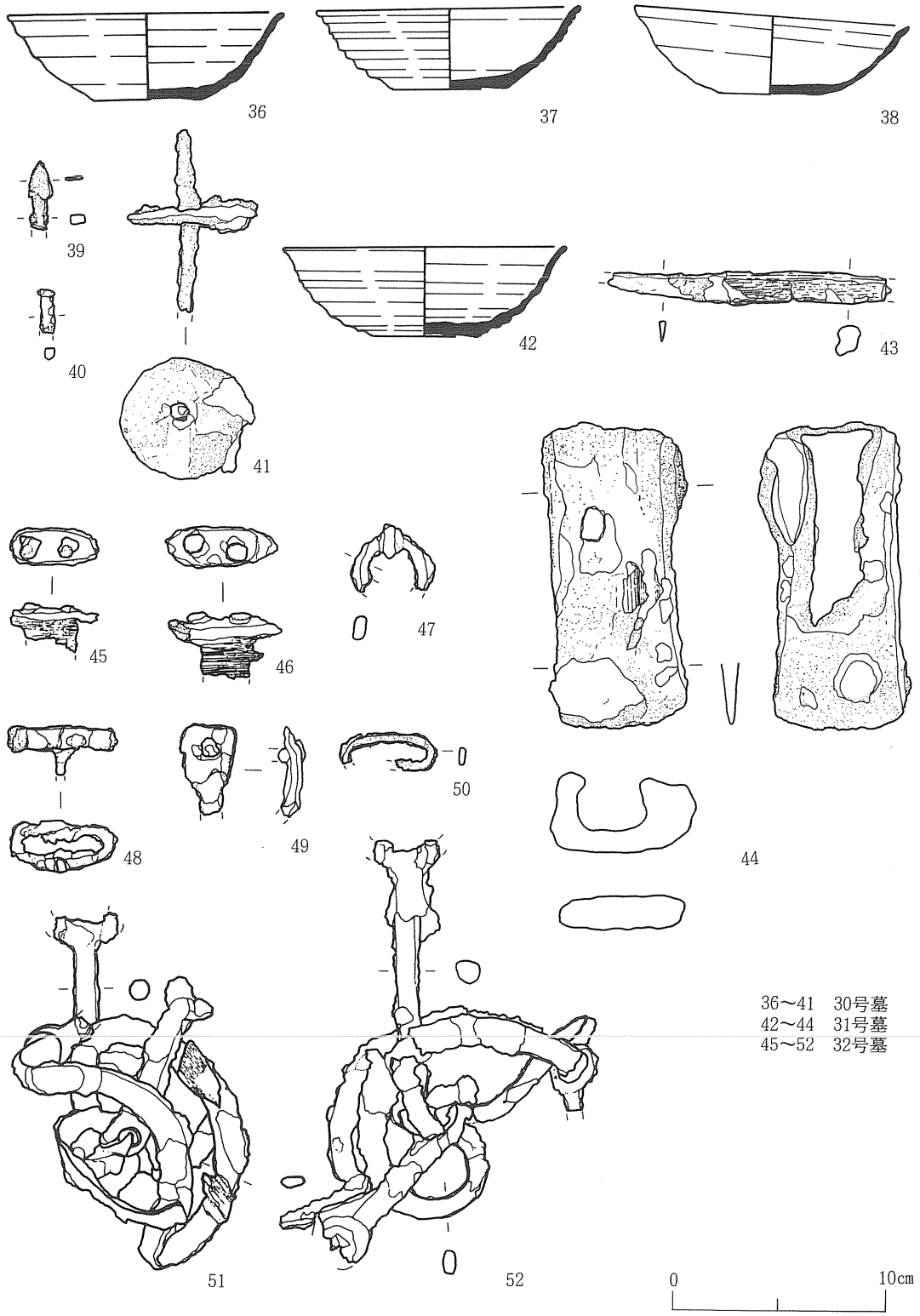


第10図　遺構内出土遺物

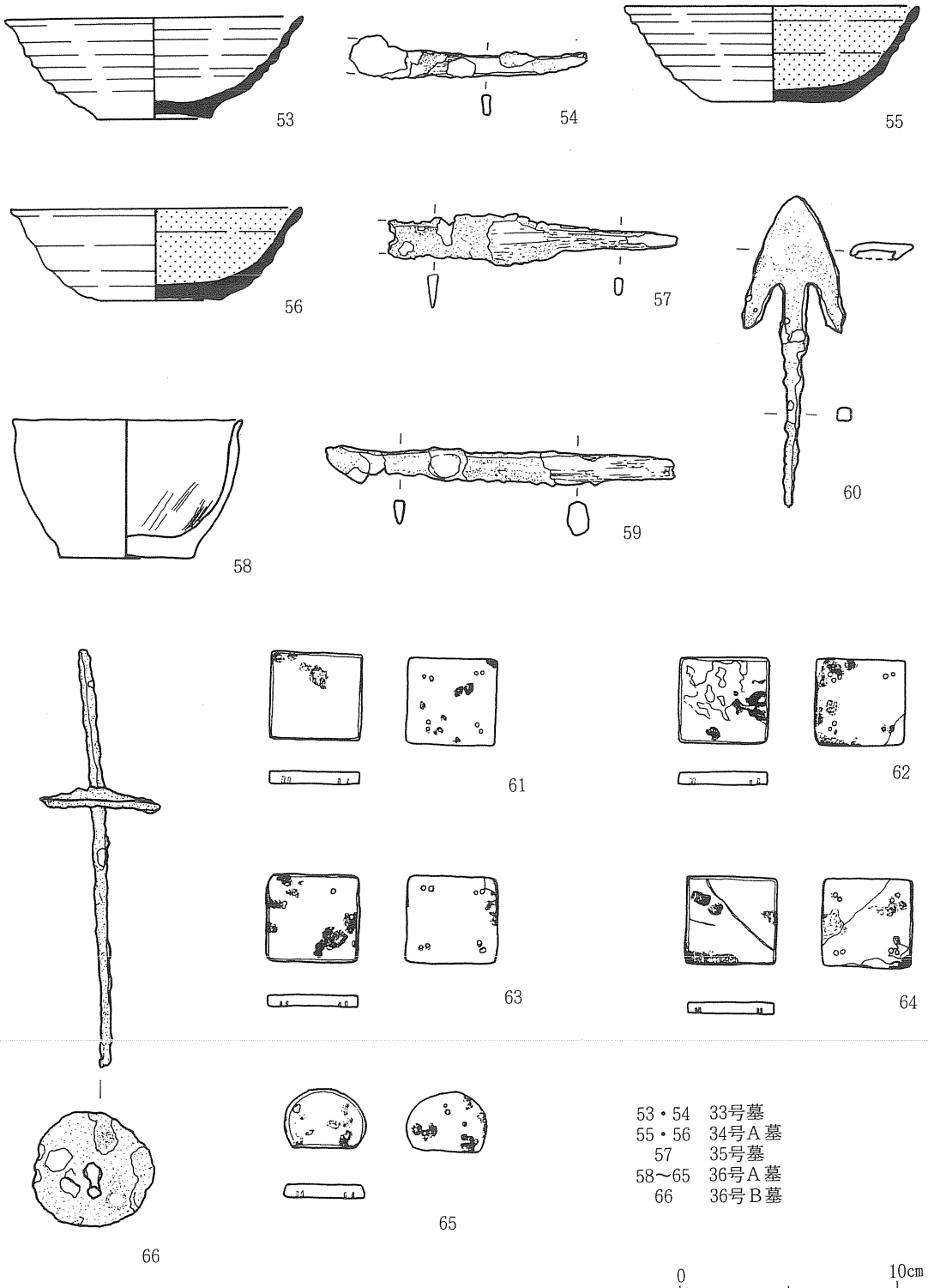


18～20　26号墓
21～24　27号墓
25・26　28号墓
27～37　29号墓

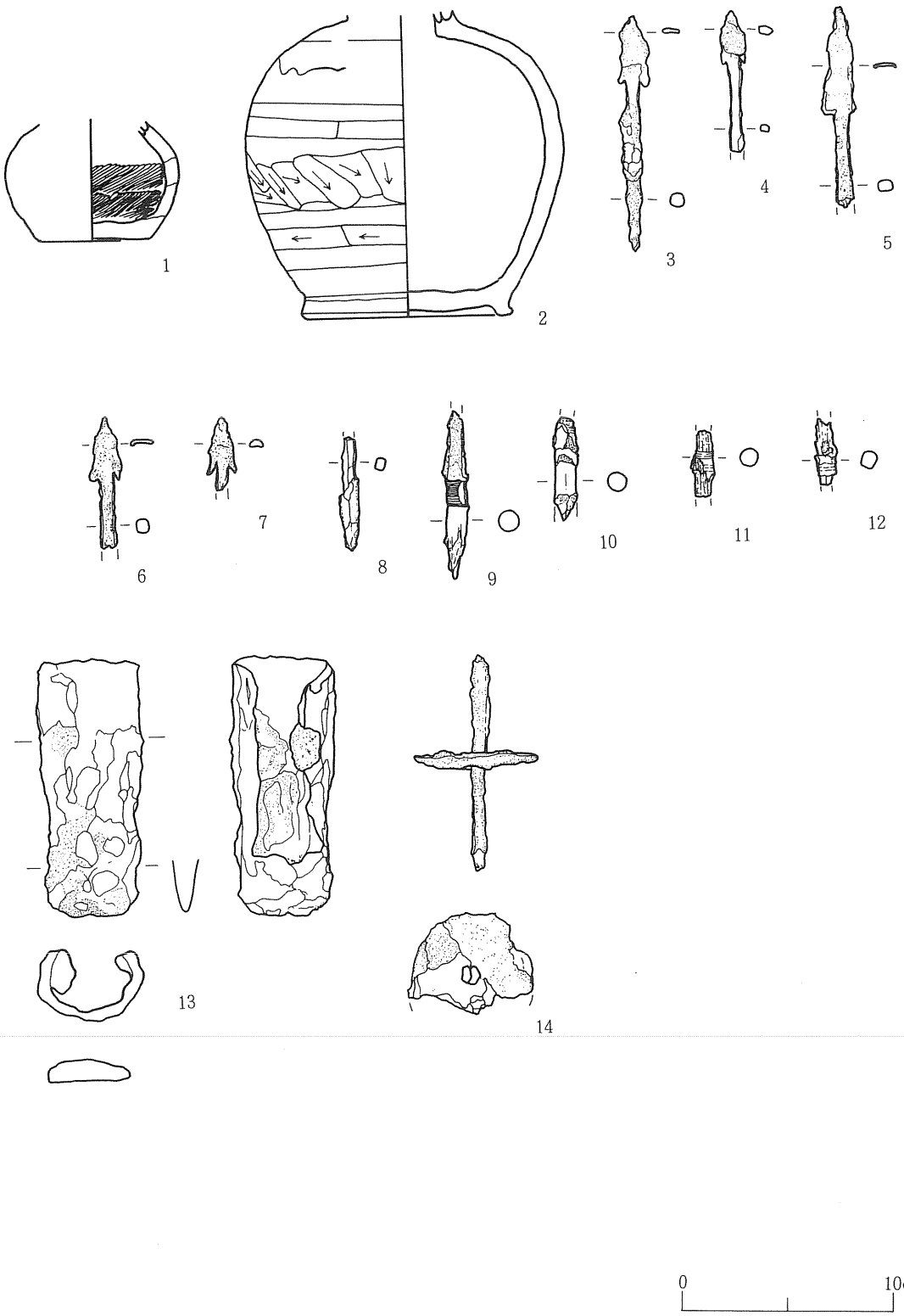
第11図　遺構内出土遺物



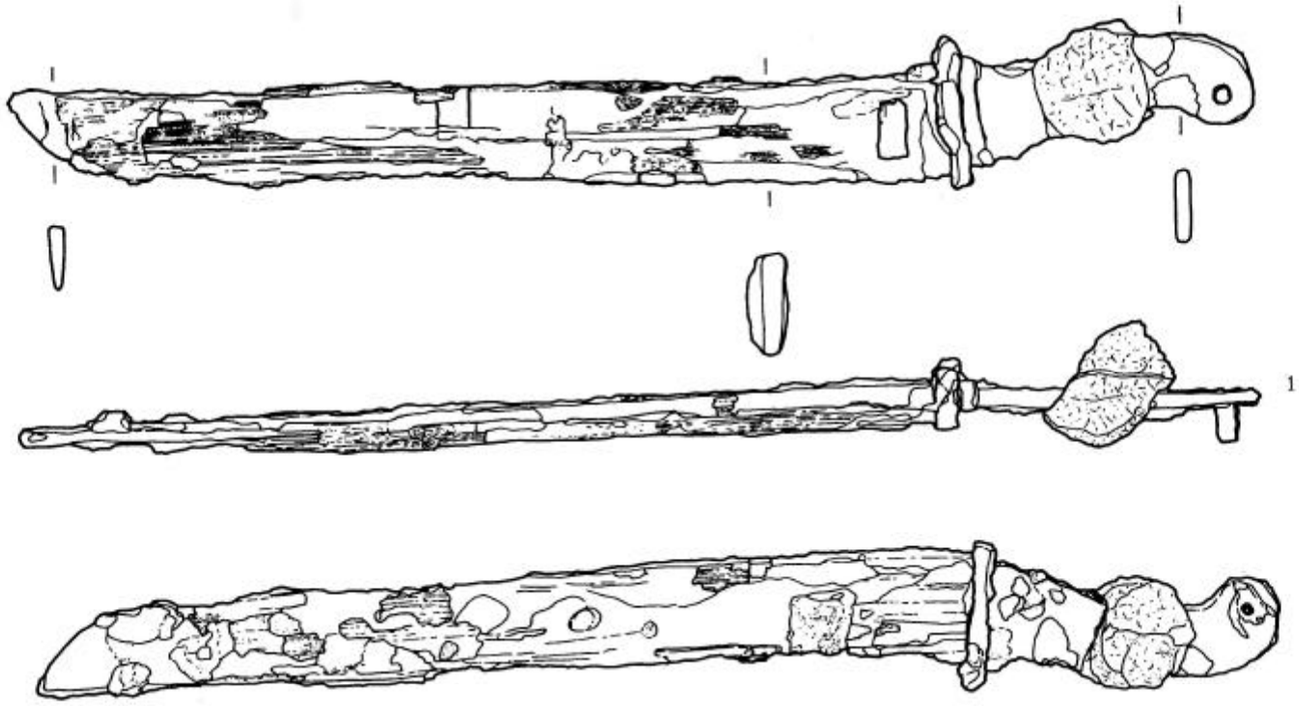
第12図　遺構内出土遺物



第13図　遺構内出土遺物



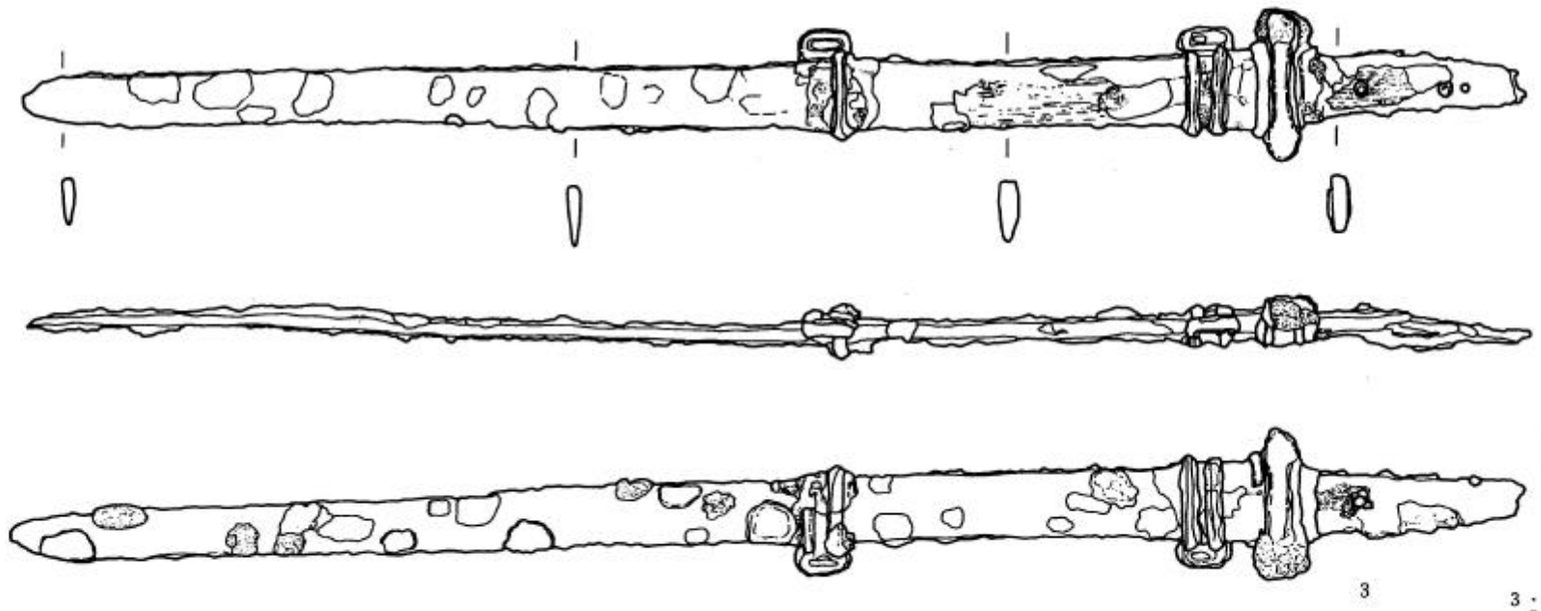
第14図　遺構外出土遺物



1・25号墓
2・29号墓

第15図　25・29号墓出土鉄刀

0　20cm



第16図　32・36号墓出土鉄刀

ま と め

弥生時代

本遺跡では土坑７基が検出された。他に弥生時代の遺構は認められない。土坑の広がりも一ヶ所に集中している。本遺跡と同様相を示す土坑群は沢を隔てた北東約400ｍの湯ノ沢Ⅰ遺跡でも検出されている。

２・３・４号土坑からは鉢形土器、甕形土器、高坏形土器などが出土している。遺構の性格については不明である。

時期については、４号土坑から高坏形土器の完形品が２個体出土している。いずれも体部に変形工字文を、台部に平行・波状の沈線文をめぐらしている。この土器は山王Ⅲ層式に比定できるものであり、弥生時代中期前葉の時期が考えられる。

平安時代

本遺跡では今年度調査で新たに19基の墓を検出した。昭和58年度調査で検出したものも含めると合計40基となり、この地域が大規模な墓域であったことが判明された。ここでは前回調査で述べたことに加筆し、さらに新しく判明したことについて簡単にまとめてみたい。

立地：西に張り出す大きな舌状台地の付根に位置する。北東、南西方向から大きな沢が入り込んでおり、墓の場所は最も標高の高い所である。墓は、東西63ｍ、南北36ｍの楕円形の範囲におさまるようである。等高線はこの地域でほぼ同心円状にまわり、ゆるいマウンド状を呈する。

構築方法：特異な34号Ａ・Ｂ、36号Ａ・Ｂ墓を除くと、規模に差はあるがプランは隅丸長方形、長円形を呈している。構築順序は①規模を決定し掘り方を掘る。②底部をある程度平らに整地する。木炭を敷いている墓もある(37号墓)。③中央部に木棺を安置する。木棺土に石を配置する墓もある(６号墓)。④掘り上げた土(黒色土・ローム)を埋め戻しする。この時マウンドをつくったものか不明である。のようである。34号Ａ・Ｂ、36号Ａ・Ｂ墓の構築順序も①～④と同様であるが、大規模な掘り方を掘っている。木棺痕跡状況などから二遺体が一緒に埋葬されたと思われる。

規模：墓の掘り方規模で最大のものは15号墓で、長軸4.1ｍ×短軸1.48ｍ、最小の11号墓で長軸1.46ｍ×短軸0.94ｍである。平均値は長軸2.51ｍ、短軸1.22ｍ、深さ0.24ｍである。木棺痕跡規模で最大は３号墓の長軸2.7ｍ×短軸0.7ｍ、最小は22号墓で長軸1.12ｍ×短軸0.6ｍである。

長軸方法：Ｎ32°ＷからＮ20°Ｅの範囲にすべてがおさまる。長軸方法から墓を分類してみると次のようになる。

Ｎ０°≦α＜10°Ｅ　12・17・22・33・35号墓

Ｎ10°≦α＜20°Ｅ　20号墓

Ｎ０°≦α＜10°Ｗ　２・９・10・15・18・25・30・31・32・34Ａ・Ｂ・36Ａ・Ｂ・37号墓

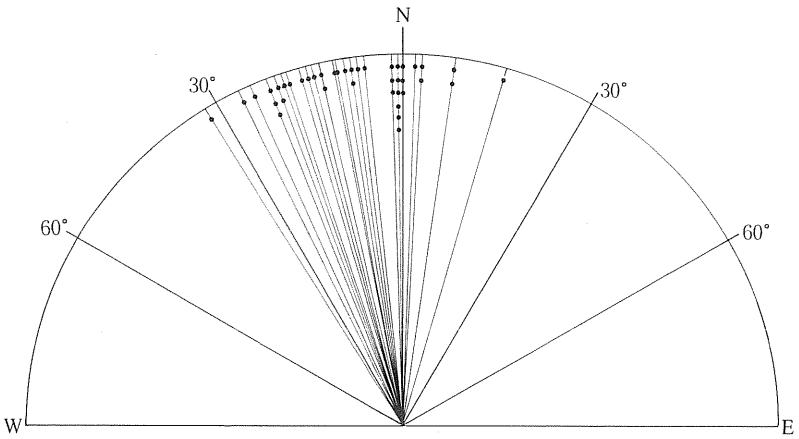
Ｎ10°≦α＜20°Ｗ　１・５・６・７・８・14・19・23・24号墓

Ｎ20°≦αＷ　４・11・16・26・27・28・29・38号墓

N　3・13・21号墓

これをみると概略北方向を意識してはいるが真北・磁北にはこだわっていない。むしろ北北西を指すものが多い。

埋葬形態：木棺である。昭和58年度調査でも木棺が想定されている。今回の調査でも木棺痕跡が明瞭に認められる墓が16基検出されている。特筆すべきことは、火熱を受けている34号Ａ墓からは人骨とともに木棺痕跡の線に沿って炭化した木棺材の一部が検出された。鑑定(註1)の結果杉材であることが判明した。形状については断面が半円形をなし杉材を半截したもののようにも思えるが一部分であり明瞭には把握できない。



第17図　長軸方位

埋葬頭位：頭位については昭和58年度調査で、副葬品の位置関係から北頭位を堆定していた。今次調査では頭位を決定づける資料として34号Ａ墓から人骨が出土（頭骨・鎖骨・上腕骨）した。出土人骨は北頭位で埋葬されており、１基だけであるがこの人骨出土により本遺跡の墓は北頭位と思われる。

性別：性別については前回の調査で、規模、副葬品からある程度推定している。今次調査では二遺体が一緒に埋葬されたと考えられる34号Ａ・Ｂ、36号Ａ・Ｂ墓の出土品に興味深いものがある。34号Ａ墓から出土した人骨は鑑定(註2)の結果、推定年令40～50才の成人男性であることが判明した。36号Ａ・Ｂ墓では、Ａ墓から鉄刀、鉄鏃、刀子、石帯などが出土しているがＢ墓からは紡錘車１点の出土である。34号墓の一方は男性と判明し、36号Ａ・Ｂ墓では明らかに出土遺物の相違がみられる。この違いは性別の相違によるものなのか興味深い。

墓の変遷：40基の墓で重複関係にあるものは33・35号墓だけであり、新旧関係をたどることは困難である。しかし一度に40基の墓を構築したとは考えがたい。墓の配置をみるとある程度規則制がみられ、８グループに分けることが可能のようである。①４・11号墓、②２・６・７・８・９号墓、③３・10・12号墓、④14・15号墓、⑤20・21号墓、⑥22・38号墓、⑦26・27・28・29号墓、⑧30・31号墓となり、これらのグループは「まとまり」を示し、極めて隣接しているが重複はなく、それぞれ長軸方向がほとんど一致しているものである。これは、互いを意識して構築されたと考えられ構築時期にそれほどの差はないと思われる。

被葬者について：被葬者を推定することは極めて困難である。しかし考える上で興味深い遺物が３号墓副葬品として出土している。底部にヘラ描きで「夫」と刻まれた回転糸切り無調整の赤褐色土

器坏である。これと同様の資料が北海道の「北大構内の遺跡」(註3)から、また墨書資料として「平城宮」のＳＤ2700遺構から出土している。それぞれ「夷」の異体字と判読している。(註4)本遺跡出土の土器も極めてこれに類似しており、「夷」と判読できるものと考えられる。「夷」の土器について二氏が興味ある見解をしめしている。１つは関口明氏が「北海道式古墳と渡嶋蝦夷」(註5)という論文の中で、渡嶋の蝦夷が出羽の国にきて国司と交易した際に国司が饗宴を開いて蝦夷をもてなし物品を給与していたことを重視し、「夷」の文字が刻まれた土器は「饗給」(註6)の場で使用された坏が持ち込まれたものであろうとしている。また「平城宮」ＳＤ2700遺構出土の墨書銘のある「夷」の土器については、佐伯有清氏が「…この地区出土の墨書土器の多くは宴会用の食器であったと考えてよい。宝亀五年（774年）には出羽の蝦夷を朝堂で饗宴したことがあった。そこで「夫」と書かれている須恵器の坏も饗宴の場で使用されたものと考えられ・・・・」(註7)と述べられている。いずれも蝦夷に給したものと考えられており興味深い。そうした中で本遺跡出土の「夫」の土器も秋田城との関連の中で上記のように考えることができないものであろうか。

時期について：本遺跡の年代を副葬品の土器から考えてみたい。坏では赤褐色土器が主体を占める。器厚の薄い、回転糸切り無調整のものである。この土器は技法的にも新しいものとされ、10世紀以降の年代が考えられる。また、26号墓出土の須恵器長頸壺の底部には、菊花状の文様が認められ、同様の土器が青森県「三内遺跡」(註8)、払田柵跡の外部北西部付近(註9)から出土しておりそれぞれ10世紀中半以降の年代が考えられている。32号墓の副葬品の鉄刀の鐔は「鉄十字透鐔」と呼ばれ、青森県「朝日山遺跡」(註10)から極似するものが出土している。石井昌国氏の論考によれば、平安時代中頃の時期が考えられている。(註11)以上のようにみると本遺跡の年代も10世紀以降の年代が考えられ、特に10世紀中半を中心とする時期と思われる。

註１．パリノサーベイ株式会社

註２．349頁、湯ノ沢Ｆ遺跡出土人骨の鑑定書

註３．「北大構内の遺跡」３、北海道大学、昭和59年３月

註４．「北大時報」２、No.347、北海道大学埋蔵文化財調査室、1983、
「北海道新聞」昭和60年、７月27日付夕刊。

註５．関口　明、「北海道式古墳と渡嶋蝦夷」古代文化、1985、７月号

註６．蝦夷に対して食を饗し、禄を給することである。「日本思想大系律令」昭和51年

註７．佐伯有清、「平城宮跡からも『夫』字銘土器」、北海道新聞、昭和60年７月27日付夕刊

註８．回転糸切りで底部および周縁に回転ヘラケズリのある赤褐色土器は、払田柵跡で嘉祥２年（849年）の紀年名のある木簡と伴出していることから9世紀中半頃の年代が考えられている。再調整が施されないものは技法的に新しいものと思われる。

秋田県教育委員会「払田柵跡」、昭和49～59年

註９．青森県教育委員会「三内遺跡」青森県埋蔵文化財報告書第37集、昭和53年３月

註10．仙北町史談会「うもれ木」第９号、昭和57年３月

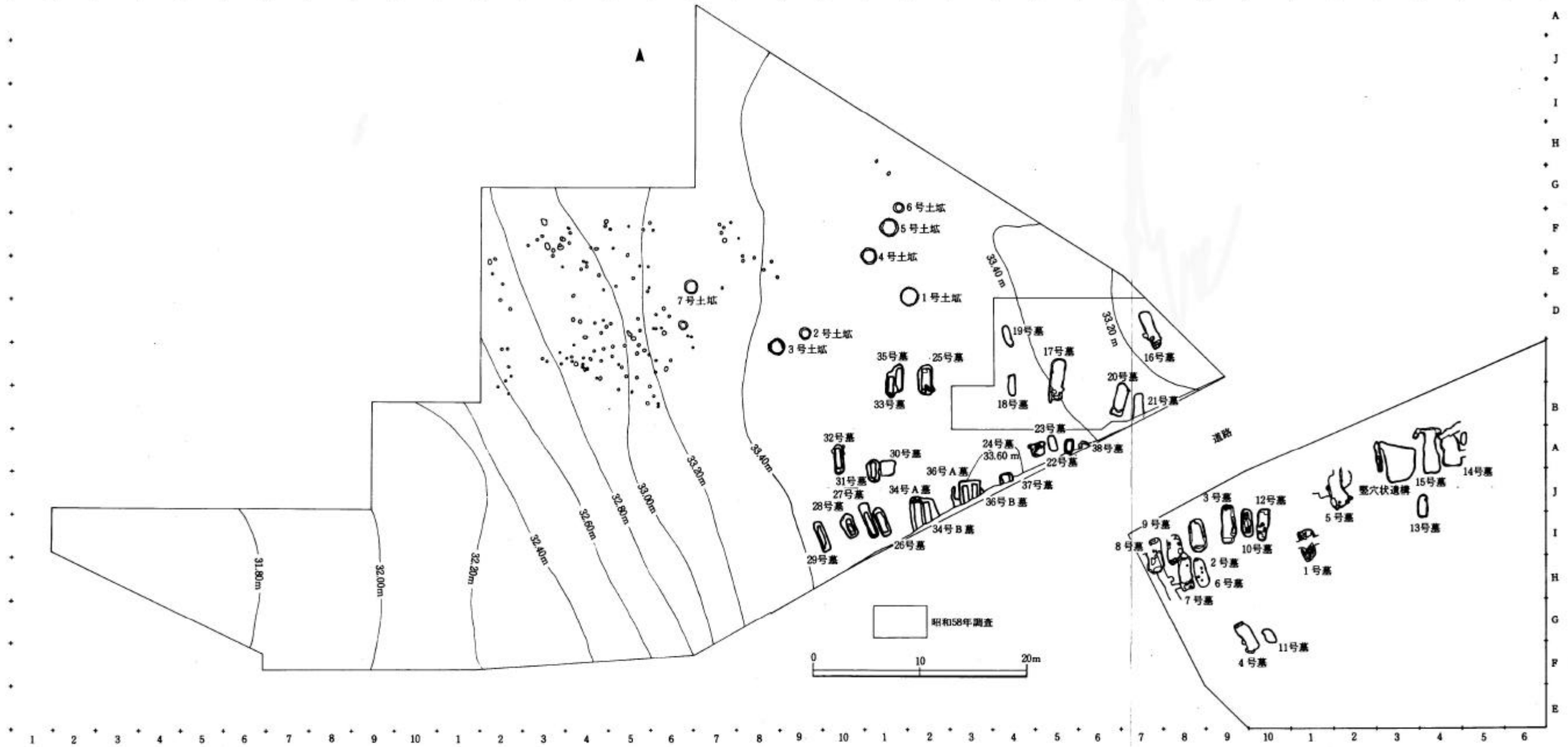
註11．青森県教育委員会「朝日山遺跡」、青森県埋蔵文化財調査報告書第87集

註以外の参考文献

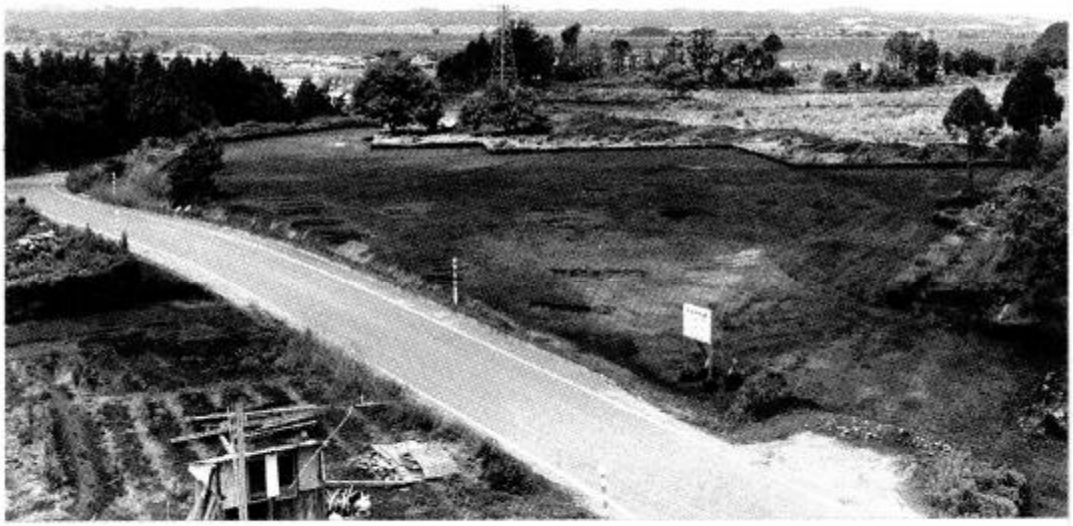
秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年３月

伊東信雄、須藤隆：「瀬野遺跡－青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究」東北考古学会、1982

須藤隆　　：「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－」考古学雑誌、1983


6号土坑
5号土坑
4号土坑
7号土坑
1号土坑
2号土坑
3号土坑
35号墓
25号墓
33号墓
19号墓
17号墓
16号墓
20号墓
18号墓
21号墓
23号墓
32号墓
30号墓
24号墓
33.60m
38号墓
22号墓
31号墓
36号A墓
27号墓
34号A墓
37号墓
28号墓
36号B墓
34号B墓
29号墓
26号墓
33.40m
33.20m
33.00m
32.80m
32.60m
32.40m
32.20m
32.00m
31.80m
道路
3号墓
12号墓
9号墓
8号墓
10号墓
2号墓
6号墓
7号墓
5号墓
1号墓
竪穴状遺構
15号墓
14号墓
13号墓
11号墓
4号墓
昭和58年調査
0
10
20m
A
J
I
H
G
F
E
D
B
A
J
I
H
G
F
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6

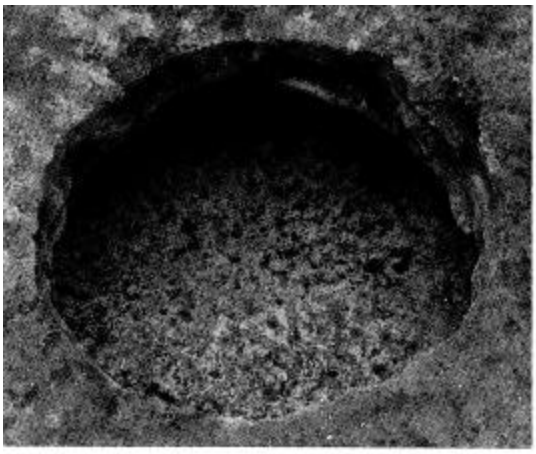
第17図　遺構配置図



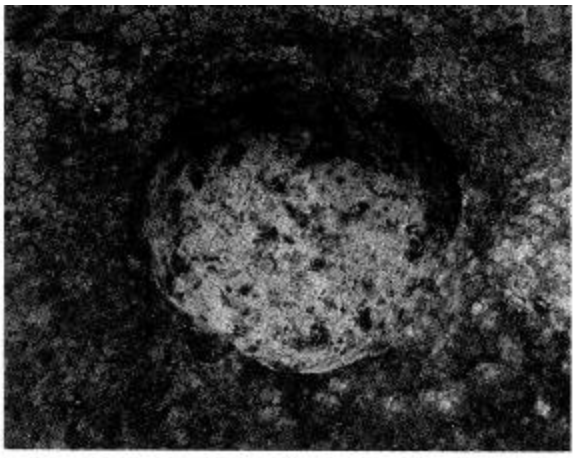
遺跡全景（東→）

遺跡全景（南→）

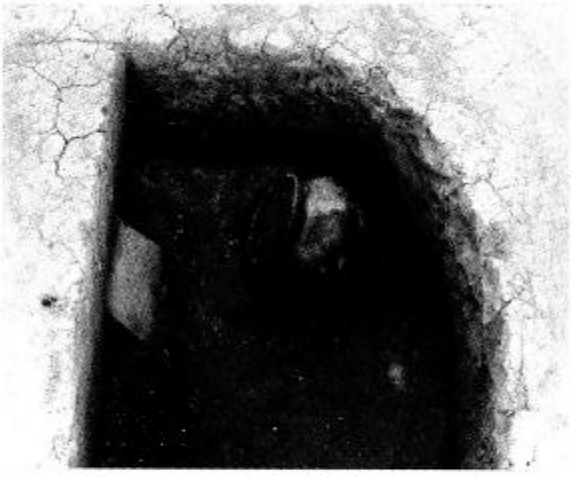
図版 1



1号土坑



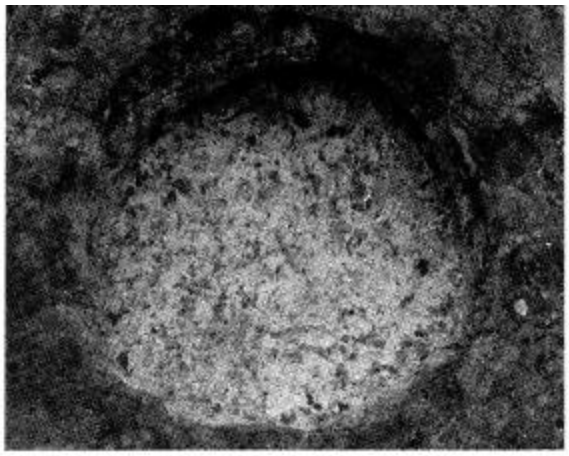
2号土坑



2号土坑遺物出土状況

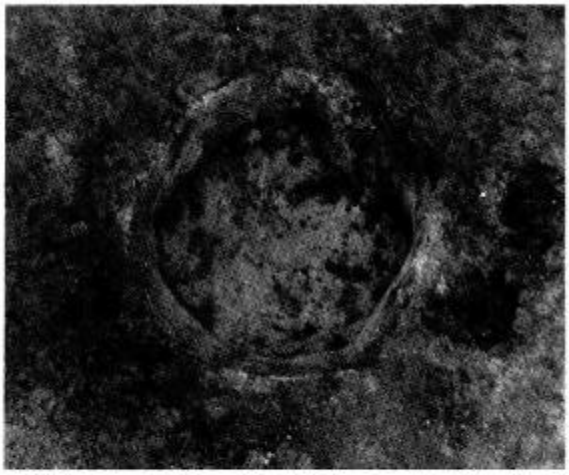
3号土坑

図版 2

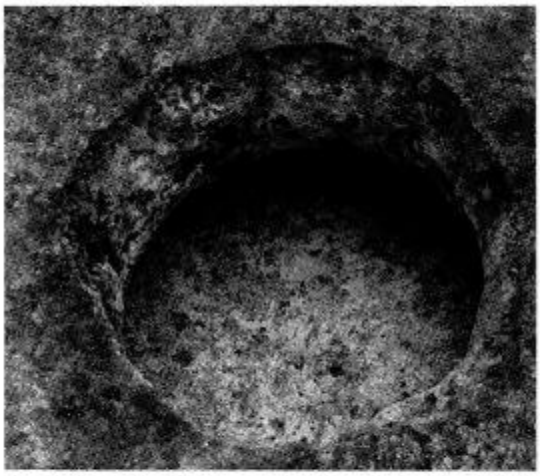


4号土坑

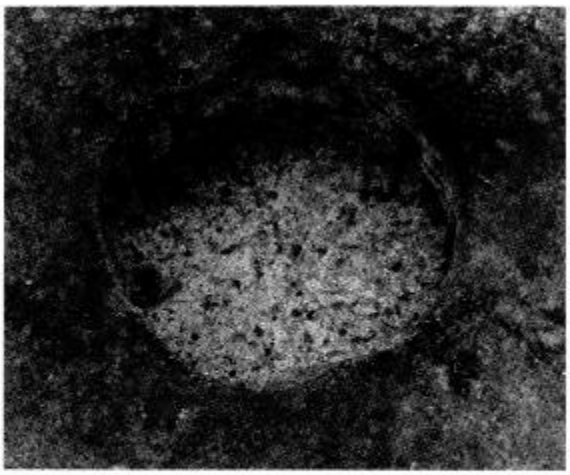
4号土坑遺物出土状況



5号土坑



6号土坑



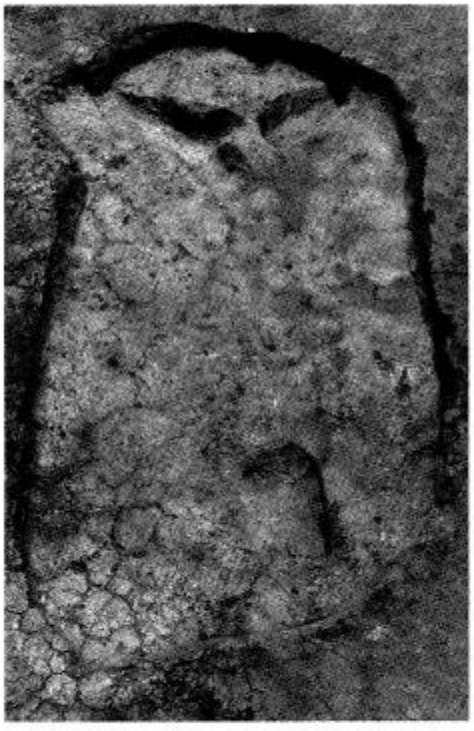
7号土坑

図版 3

22号墓（北→）

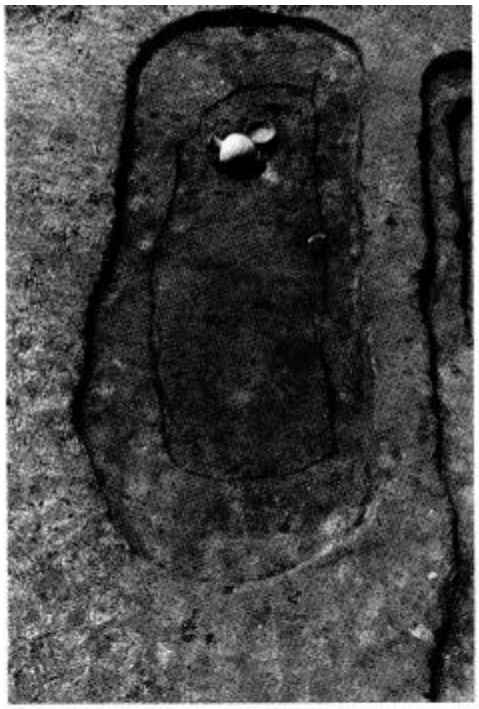
23号墓（南→）

25号墓（南→）



25号墓（完掘）（南→）

図版 4



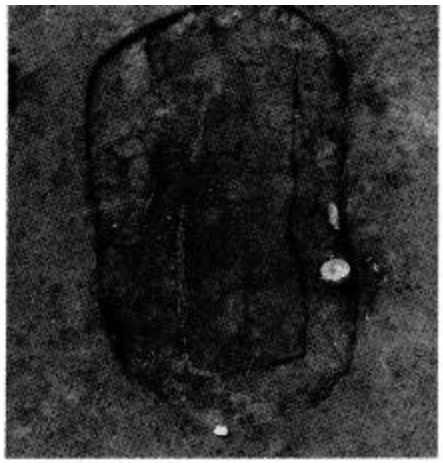
26号墓（北→）

26号墓（完掘）（北→）

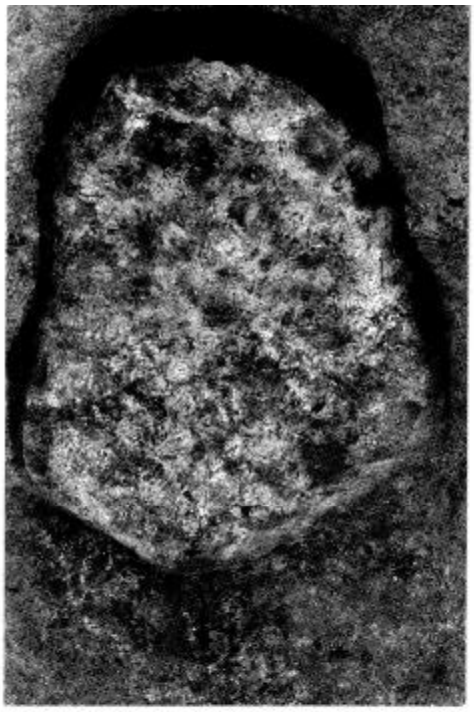
27号墓（北→）

27号墓（完掘）（北→）

図版 5



28号墓（南→）

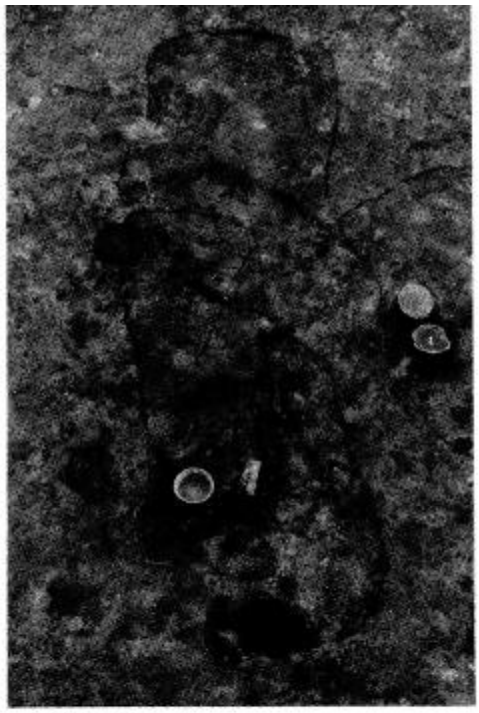


28号墓（完掘）（北→）

29号墓（南→）

29号墓（完掘）（北→）

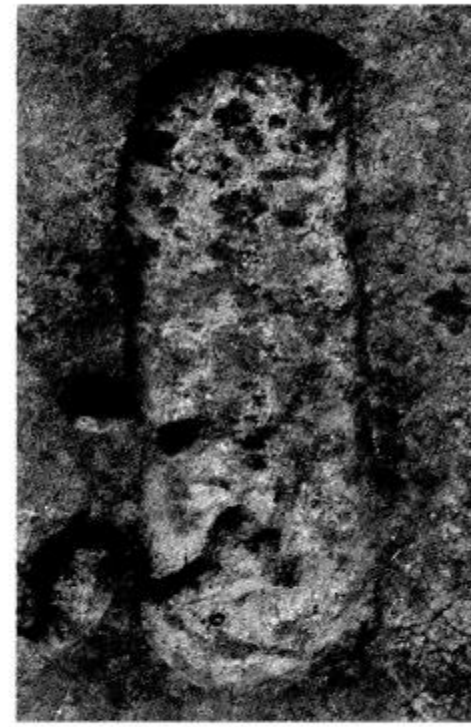
図版 6



31号墓（南→）

31号墓（完掘）（北→）

32号墓（南→）

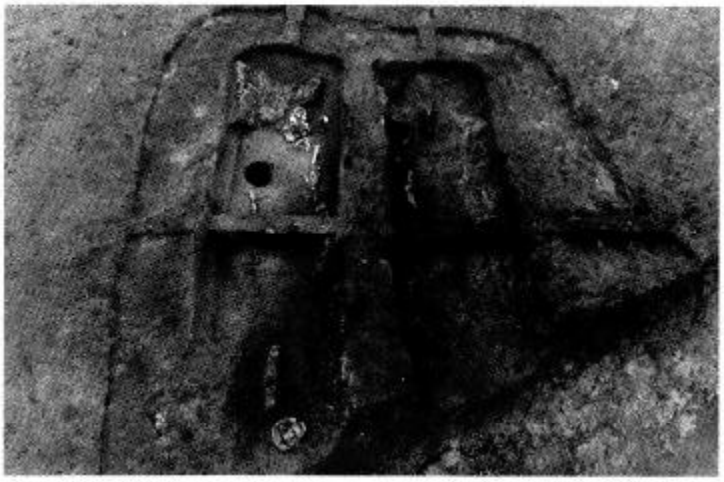


32号墓（完掘）（北→）

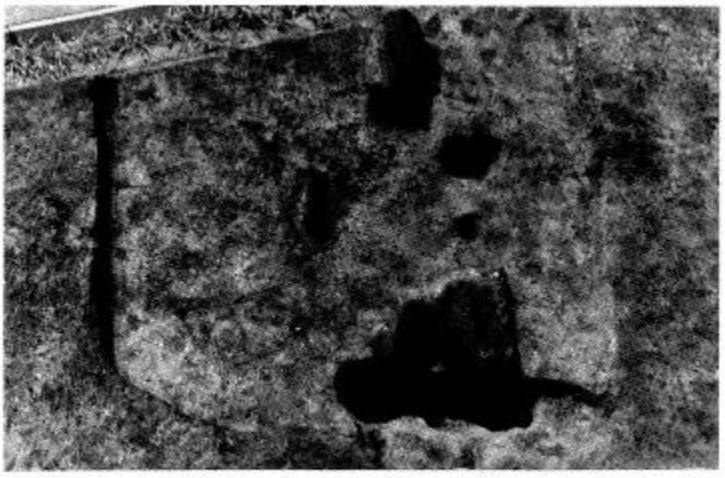
図版 7

33・35号墓（南→）

33・35号墓（完掘）（南→）



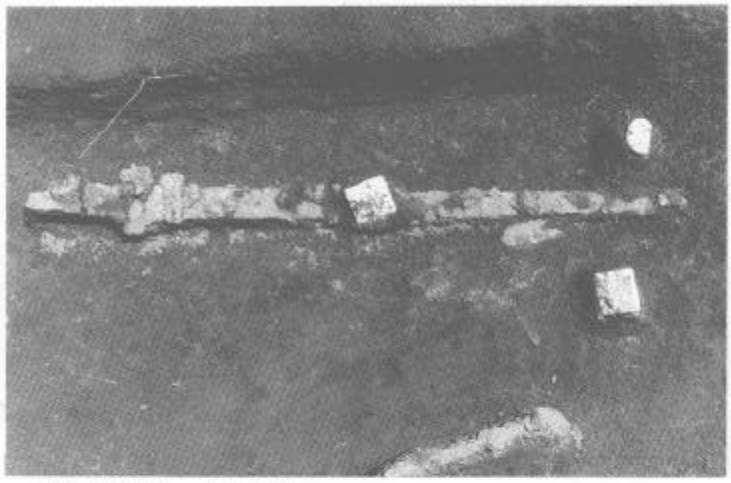
左上　34号A・B墓（南→）
上　34号A墓検出人骨



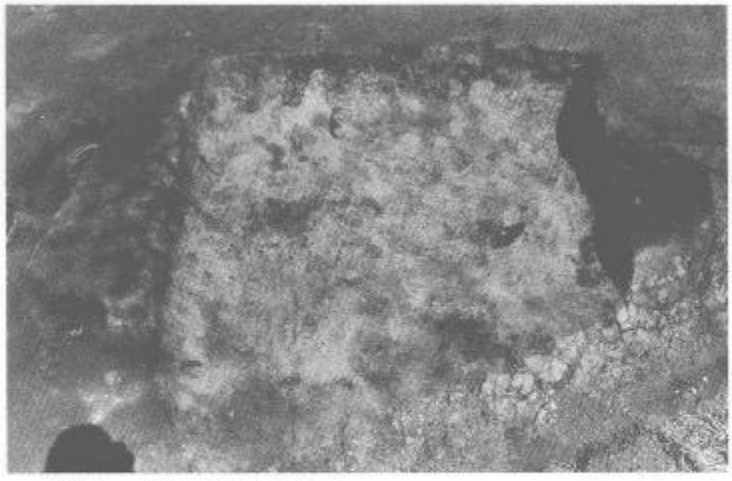
34号A・B墓（完掘）（北→）

図版 8

36号A・B墓（南→）

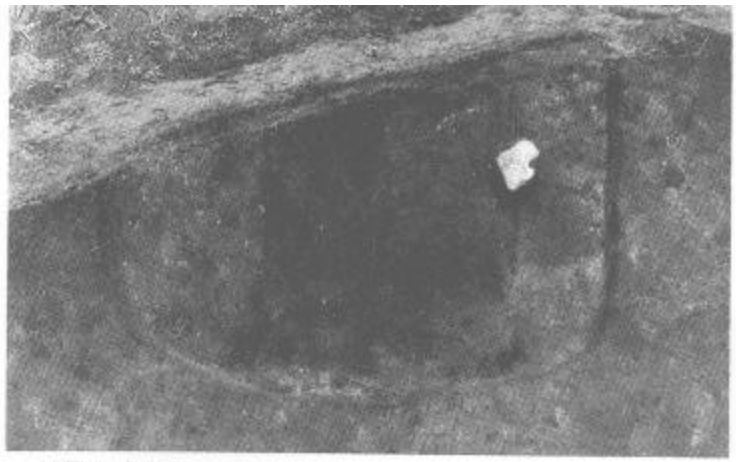


36号A墓出土　刃・石帯

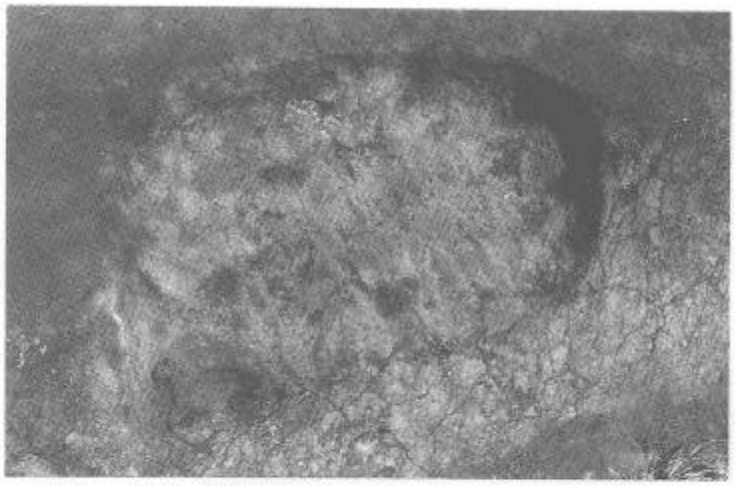


36号A・B墓（完掘）（南→）

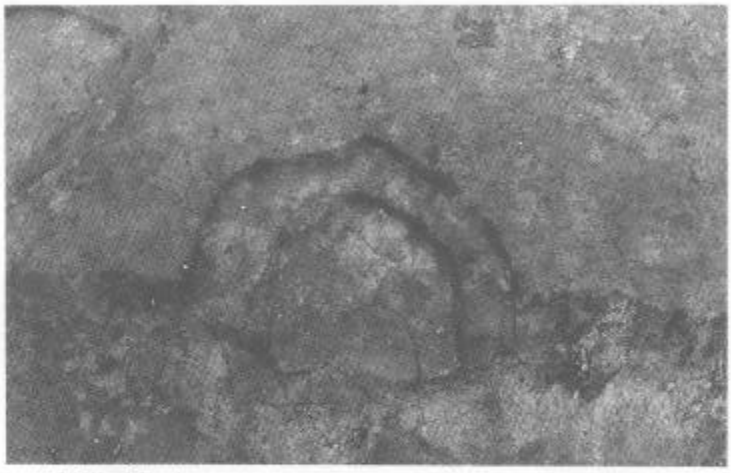
図版 9



37号墓（北→）



37号墓（完掘）（南→）

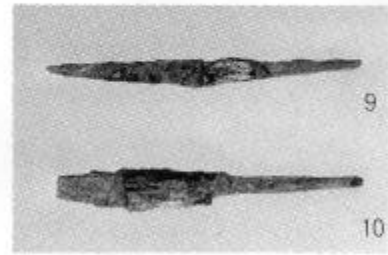


38号墓（南→）

図版10

1　　2号土坑
2　　3号土坑
3～4　4号土坑

5～7　22号墓
8～10　25号墓



図版11

1

2

3

4

5

6

7

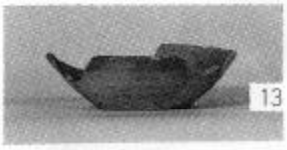
8

9

10

11

12


13

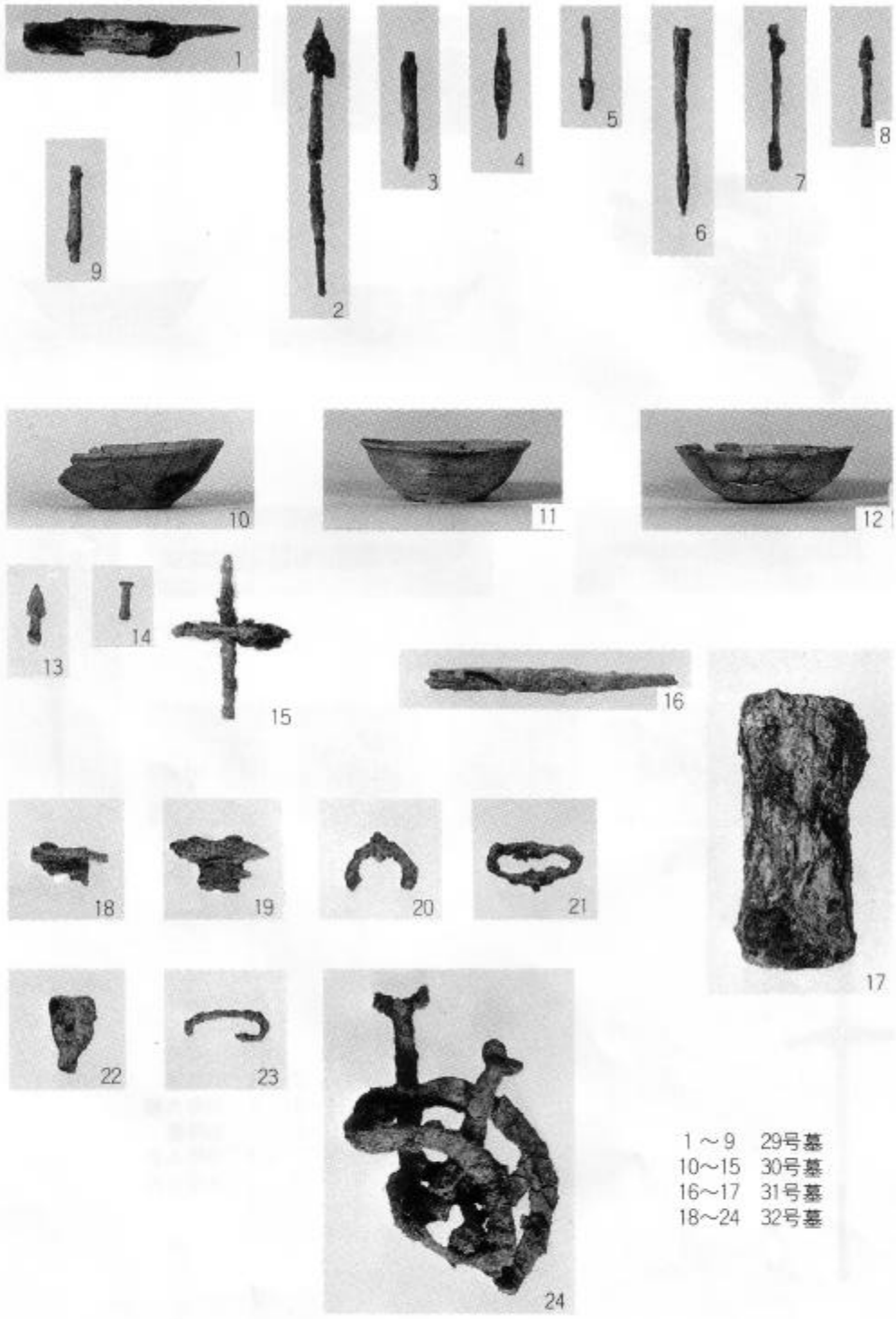
14

15

16

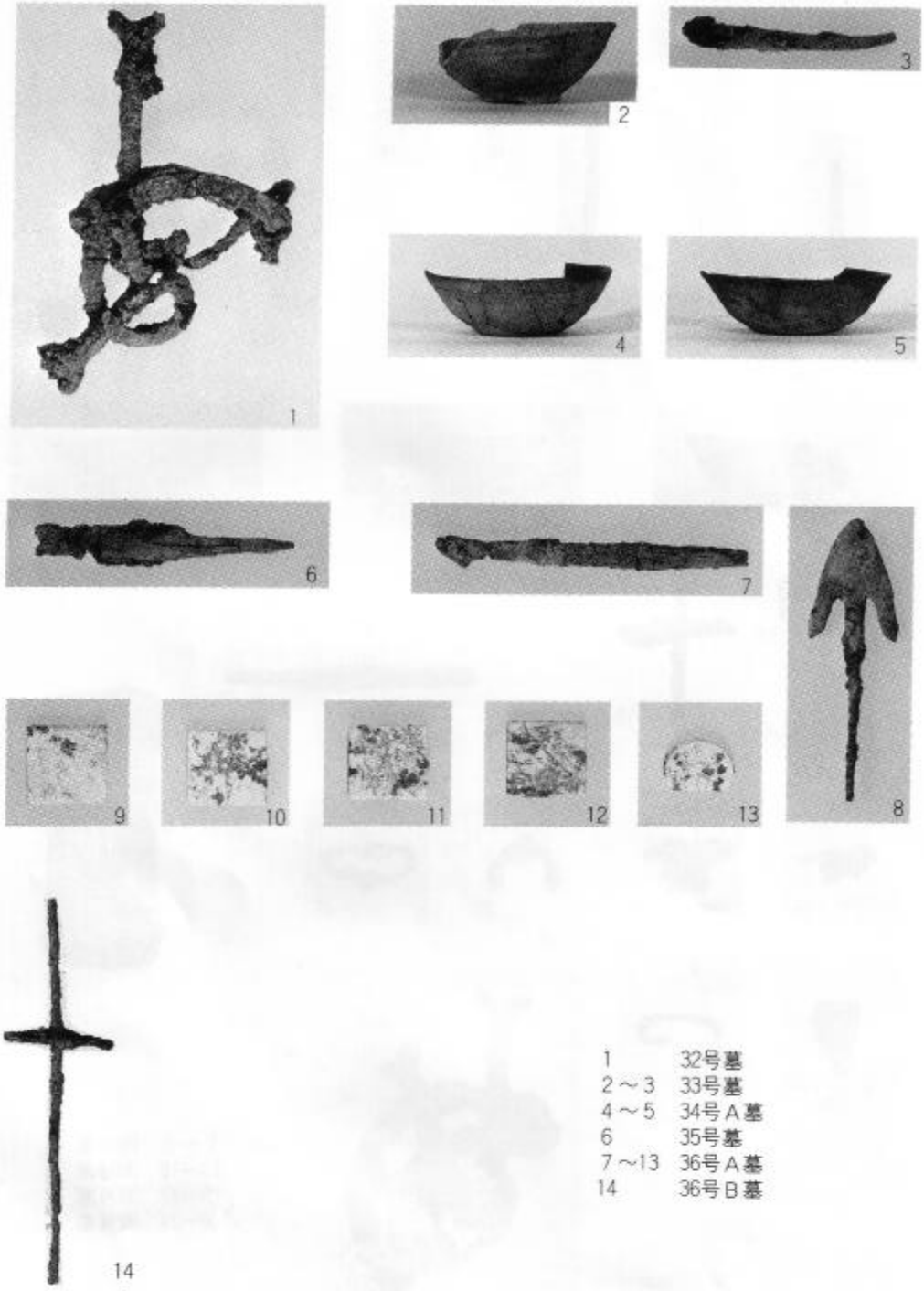
1～9　25号墓
10～12　26号墓
13～15　27号墓
16　28号墓

図版12



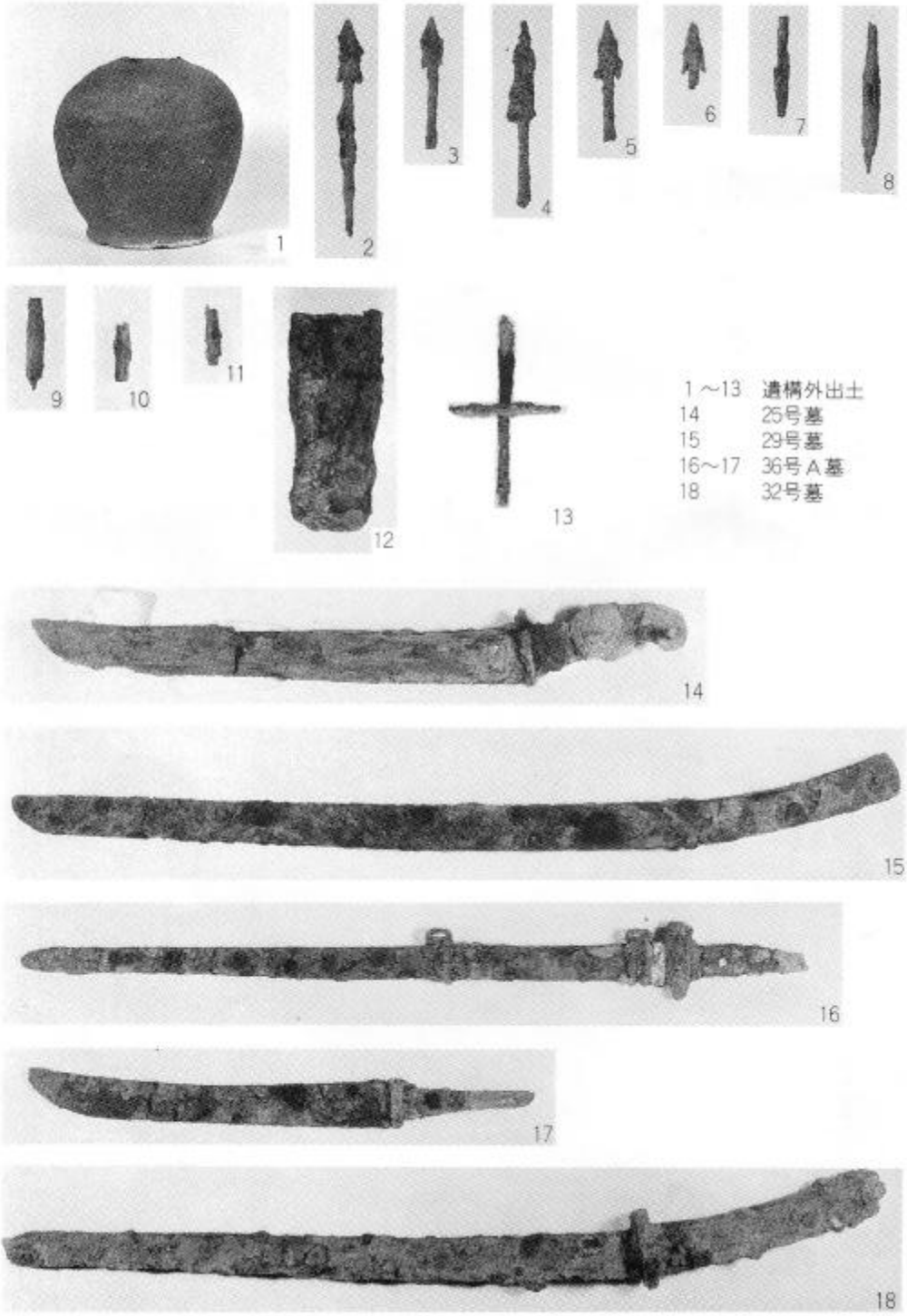
1～9　29号墓
10～15　30号墓
16～17　31号墓
18～24　32号墓

図版13



1	32号墓
2～3	33号墓
4～5	34号A墓
6	35号墓
7～13	36号A墓
14	36号B墓

図版14



1～13　遺構外出土
14　25号墓
15　29号墓
16～17　36号A墓
18　32号墓

図版15

秋田市四ツ小屋・湯ノ沢Ｆ遺跡出土人骨の鑑定書

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

教　授　野　坂　洋一郎

助教授　伊　藤　一　三

1．序

標記遺跡より出土人骨１体について鑑定を行った。本人骨は頭部を北に向けた仰臥位で埋葬されていたが、顔面頭蓋が前面より圧迫され、押しつぶされた状態で出土した。そこで、骨を含んだ土を一塊として切りだし、表層をワックスで被覆した状態で保存し、現場から研究室へ移送した。土塊を除去して出土した骨は図１のごとく配列していた。下顎骨、鎖骨、上腕骨は比較的良好に保存されていたが、顔面頭蓋は小破片となり、骨質は脆く、破損が大きく、破断面は角が丸くなり断端を結合して復元することは困難であった。

2．結果

発掘した骨のうち、部位の同定が可能な骨は表１に示すごとくであった。人体の全骨格からすると出土した骨は非常に少なく、土圧などにより細骨片状になり、骨片の断面および表面は摩耗しており骨片となってから、時間的経過が長かったと思われる。そのため頭蓋冠の一部を除くと、復元は困難であった。しかし、頭蓋冠の縫合部が残存したので、縫合の癒合の程度をＲｉｂｂｅの分類にのっとり分類した。その結果、冠状縫合の矢状縫合との合流点における癒合度は、外板で１～２度、内板で２～３度を示し、年齢は40歳～50歳と考えられる。矢状縫合は冠状縫合との合流点で外板、内板ともに２～３度を示し、頭頂部は外板

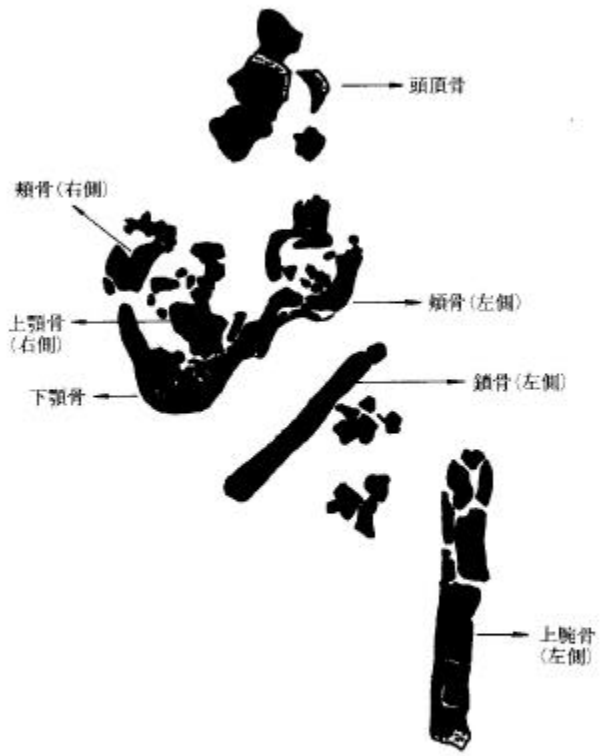


図１　出土人骨の位置関係

が１～２度、内板が２～３度であった。そこで年齢は40歳代と考えられる。

口蓋は破損により鼻腔側は完全に損失しているが、正中口蓋縫合の口蓋骨部後方１／３は表面にわずかではあるが縫合が残存しており、30～50歳と推定された。さらに右側上顎歯槽部における切歯縫合の癒合は50歳代程度の癒合度を示した。

以上の顔面頭蓋の縫合における癒合度を総合すると、40歳代と推定される。

性別を判定できる骨は殆んど出土しなく、判定は困難であるが、頭蓋冠の厚さが比較的厚く、上腕骨の骨体部で中央最小径が17.75mm、現代日本人（関東人）の平均値は男性で17.74mm、女性で14.70mmと大きな差が認められる。本個体の場合は男性の平均値と略同値を示したことより男性個体と類推された。さらに、下顎骨における筋肉の付着部であるオトガイ隆起の突出が強く、男性と考えられるが、決定できる強い要素には欠けている。

下肢骨が出土しないため、身長の推定は出来ない。

下顎骨をマルチンの計測項目のうちより計測可能な部位について計測すると、前下顎幅：47.5mm、下顎体高のオトガイ孔部：31.0mm、第二大臼歯部24.0mm、下顎体厚のオトガイ孔部12.0mm、第二大臼歯部13.5mmであった。

この計測値のうち左側第二大臼歯部の下顎体高と下顎体厚が平均より２～３mm小さな値を示し、それ以外の値は平均値とほぼ同様であった。歯牙の所見の詳細は表２に示したが歯牙と顎骨を関連付けて観察すると、左側大臼歯部においては歯槽は完全に閉鎖し、歯牙

部　位	骨　名	左側；右側	備　　考
頭蓋冠	前頭骨	○　○	前頭稜を含む左側半分の一部と冠状縫合を含む前頭骨の正中より右側部分
	頭頂骨	○　○	左側；矢状縫合と冠状縫合を含む前頭角部 右側；矢状縫合を含む一部
顔面骨	頬　骨	○　○	左右側とも前頭突起で前頭頬骨縫合を含む部分
	上顎骨	○　○	左側；56の歯槽突起を含み口蓋突起を含む部分 右側；654321 歯槽突起と口蓋突起
	口蓋骨	○　○	左右側が正中で縫合している水平板の一部
	下顎骨	○	左右側の筋突起と下顎体
上肢骨	鎖　骨	○	鎖骨体のみで肩峰端と胸骨端は欠損している
	上腕骨	○	上腕骨体の中央１／３のみ

表１　出土人骨一覧表

表２　歯牙所見　湯ノ沢Ｆ遺跡出土人骨の歯牙計測値（番号：G17Ⅱ：ＳＫ34Ａ）性別：♂

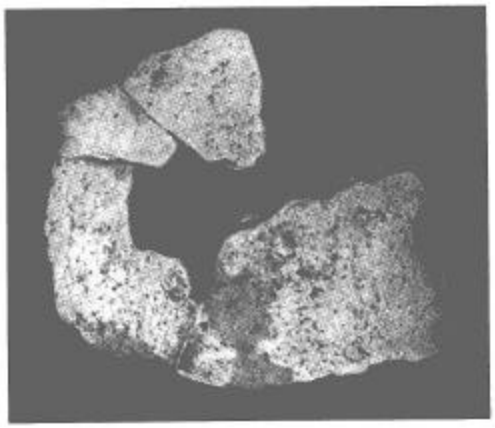
右側									左側							
								歯冠形質								
								上 裂溝形態 上								
								う蝕								
								咬耗度								
	6.8	6.6	7.22	7.99	10.09	9.39	10.77	歯冠長 日本人平均値	10.77	9.39	10.09	7.99	7.22	6.6	6.8	
								出土人計測値								
	11.4	11.3	9.08	9.34	8.24	6.42	7.01	歯冠厚 日本人平均値	7.01	6.42	8.24	9.34	9.08	11.3	11.4	
								顎 出土人計測値 顎								
	10.0	10.6	6.86	7.30	7.85	6.97	8.33	歯冠幅 日本人平均値	8.33	6.97	7.85	7.30	6.86	10.6	10.0	
								出土人計測値								
▲	▲	×	□	□	□	□	□	存否	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
8	7	6	5	4	3	2	1	歯式	1	2	3	4	5	6	7	8
▲	0	□	□	□	○	○	□	存否	□	□	□	□	□	×	×	▲
	11.1	11.6	7.17	7.00	6.92	5.93	5.33	歯冠幅 日本人平均値	5.33	5.93	6.92	7.00	7.17	11.6	11.1	
								出土人計測値								
	10.5	10.7	8.35	7.77	7.84	6.09	5.64	歯冠厚 日本人平均値	5.64	6.09	7.84	7.77	8.35	10.7	10.5	
								出土人計測値								
	6.6	6.9	7.26	8.15	10.29	8.64	8.38	歯冠長 日本人平均値	8.38	8.64	10.29	8.15	7.26	6.9	6.6	
								出土人計測値								
								咬耗度								
	C_4残根	C_4						う蝕								
								下 裂溝形態 下								
	遠心根のみ				歯根のみ	歯根のみ		顎 歯冠形質 顎								

◎：顎骨に歯牙が植立している。
○：歯牙のみ存在する。（顎骨が死後破損し、歯槽部が欠損したもの）
▲：歯牙および歯槽ともに認められないもの。（標本が破損しているため確認ができない）
×：Ｘ線的に歯牙および歯胚が存在しないもの。
□：歯槽のみ認められるもの。

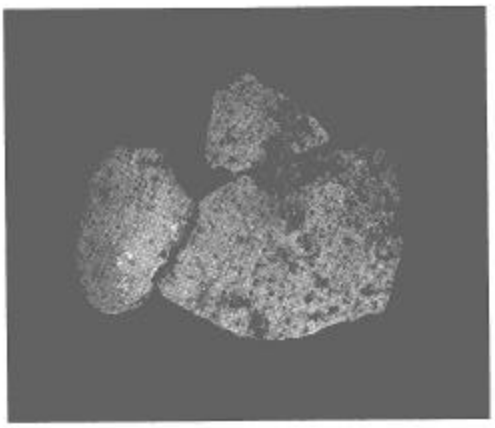
が喪失してから、そうとう長い年月を経ていると考えられる。右側下顎大臼歯は第一、第二大臼歯ともに齲蝕のため歯冠が崩壊して遠心根のみが歯槽内に、残根状態で留まっていた。上顎においては、左側第一大臼歯が齲蝕により喪失している。歯牙の保存状態は悪く、歯冠部は残存せず、わずかにエナメル質の破片が１個認められた、大部分の歯根は歯槽内に残存して出土した。このような歯根の状態からすると、明らかに齲蝕により崩壊して残根状態を示した大臼歯以外にも、口腔内には齲蝕が多かったのが類推される。さらに、左側下顎大臼歯部のように喪失後、時間経過が長く歯槽が完全に閉鎖していることからすると、年齢は少なくとも40歳代と考えられる。

ま と め

秋田市四ツ小屋・湯ノ沢Ｆ遺跡（G17Ⅱ：ＳＫ34Ａ）より出土した人骨につき鑑定した結果40～50歳の男性の個体であった。保存されていた骨格が少ないため、身長、死因等は不明であった。



頭頂骨 前頭角

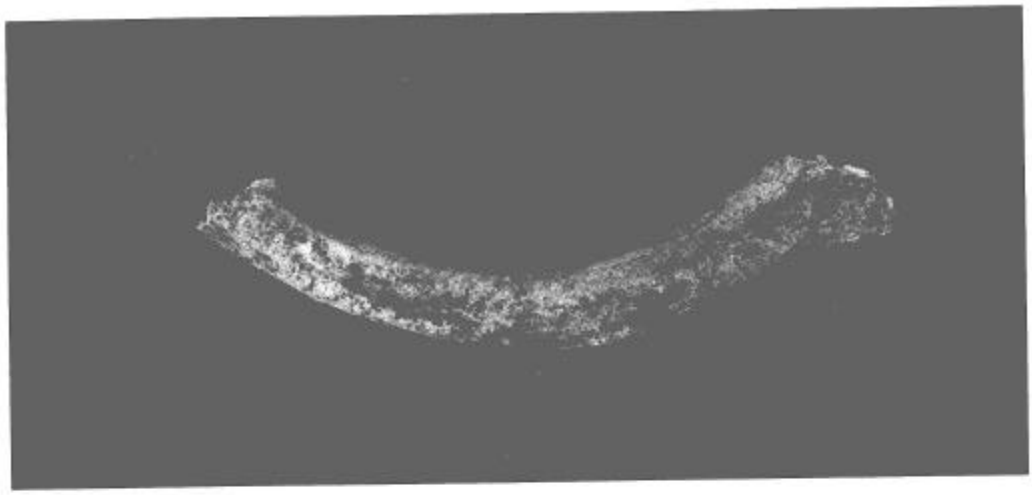


前 頭 骨

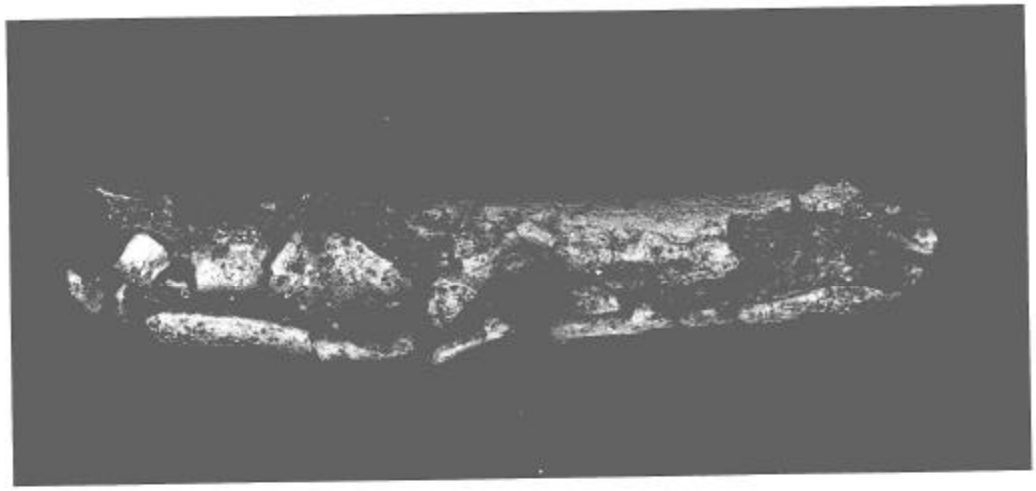
頭 頂 骨　右側

下 顎 骨

図版 1



鎖　　骨



上腕骨　左側

（実寸大）

図版 2

湯ノ沢Ｆ遺跡試料　材同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試料

試料は１点で、平安時代のものとされる土壙から出土した棺材とされる炭化材である。

2．方法

試料は多量の土壌とともに送付されたため、これに水を加えて放置し、材と土壌を分離した。水に浮いてきた試料を十分乾燥させたのち、木口・柾目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版１）も作成した。

3．結果

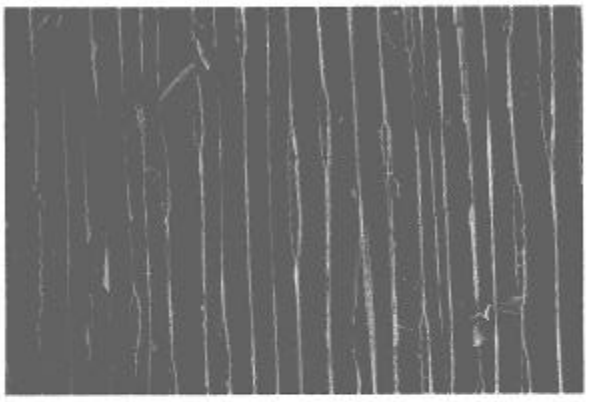
試料はスギ（Cryptomeria japonica)と同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的性質は、次のようなものである。

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生するスギ科の常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

木口
×70

柾目
×140



板目
×140

図版 1　　Cryptomeria japonica

秋田市
秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書
昭和61年3月

発　行　秋田市教育委員会

印　刷　株式会社三戸印刷所